

340

25



始



H3H-27
194

340-25

書叢藝文外海



七死囚物語

アエーレドンア・ドーニオレ

竹
竹
竹

京 東

版 藏 社 藝 文 外 海

大 正
2. 5. 20
内 交

『海外文藝叢書』の發刊に就て

磯際に咲く薄紫の小草の花にも、大海の潮の香を嗅ぐことが出来る。海を戀ふる私達の心は、直ちに自由を思ひ、新しい天地を戀ふる心である。新しい天地に自分の身を見出して見たい、新しい日の光の下に花草の香を嗅いで見たい。

海を越えゆく旅人の上にも、私達は思を繋ぐ。海を越えて来る新しい藝術の花に、せめて心の宿りを求めて見たい。

黒づんだ舊い大地の面でも、新しい光で照して見れば、新生の萌芽が籠つてゐるに違ひない、新しい生命、新しい藝術の輸入は私達に命の糧を與へてくれる。

夙^{はや}業^{すて}に来るべかりし新文藝輸入の時期は、今にして初めて私達の上に及んでゐる。決河の勢で私達の上に流れて注ぐ。この流れの勢を到るべき處まで到らせて見

たい。新しい命の泉を力強く溢れさせ度い。

名詞のみ徒らに喧傳せられて、實質の伴はなかつた缺陷を補ふべき時が初めて来た。新生の光りに、新天地の自由を、味ひ汲まんと求めらるゝ人々の爲めに私達は、この美しい叢書を提供したいと思ふ。

大正二年五月

海外文藝社同人

緒言

本書はロシア現代作家アンドレーエフ氏の“Razskaz o semi Pobeshennykh”を英譯から重譯したものである。表題は英譯では單に“The seven who were hanged.”となつて居るが、原書のに従つて特に「物語」の二字を加へた。

この作はアンドレーエフ氏が一九〇八年の作で、英譯書に添へてある原作者から英譯者への手紙によると、此の作に於ける作者自身の目的は「死刑と云ふ事が如何なる、條件の下に於ても怖ろしく且不公平なものだと云ふ事を示さうとする」にあるとの事である。併し讀者たる私達の此の作から受ける印象は、單に死刑問題と云ふ以上にもつとく、廣い深い人生の意義の暗示である。もし此の書が單に作者自身の目的とした死刑問題だけしか書いてないものであつたら、私はおそらく翻譯するやうな骨折はしなかつたであらう。

イギリスの批評家モーリス・ベリング氏が嘗て近代ロシア文學と題する論文の中で、次のやうな事を云つた事がある。

「おかしな事には現在ロシアに現はれつゝある殆んど凡ての文學は——神祕主義、デカダン主義乃至その他多くのイズムに陥つた少數の唯美派作家の作品を除く外は——その主題として政治上の出来事のみを取扱つて居る。監獄、警察、團體、選挙、黨派、暗殺、爆裂彈、革命黨、保守黨、無政府主義者、つまりかう云つた風なもの凡て新文學の取扱ふ材料の大部分である。而も更に面白い事はかう云つた風なセンチシヨナリズムの材料を取扱ひながら、その文學が少しもセンチシヨナリズムにならないと云ふ事實である。この一事は同じやうな題材を取扱つた英獨の文學と比べてロシア文學の驚くべき特長である。而してその因て來る所以は偏にロシアの作家がよく人民を理解して居る點にある。つまり自分等の描いて居る人民の心事を充分に理解して居るからである」

アンドレーエフ氏の此の作に於て私の認める價値の存する所も亦此の一點に出でない。即ちその取扱つた材料はセンチシヨナルでも、それを取扱ふ作家の態度が常に第一義要求に忠實である點が、矢張此の作の藝術品としての價値の存する所以なのである。

さてかくの如き作品を読んだり譯したりしていつも私の感ずる事の一つは、日本の現代作家の當面の社會問題、生活問題等についてあまりに冷淡である。しかもさう云ふ當面の問題を取扱ふ事を、徹頭徹尾一種の俗事業のやうに心得、さう云ふ事柄に頭を費す事を藝術家としての墮落である如く思ひ込んで居るやうな傾向のある事である。かう云ふ傾向は要するにさう云つた問題を自己の第一義要求に基いて觀察し思考する事を知らないからである。自分の生活に對して甚だしく無自覺な状態に居るからである。

このやうな日本文壇現在の状態に何等かの反省を促す上から云つても、アンドレ

七死刑囚物語

アンドレーエフ作
相馬御風譯

「エフやゴリキークープリンやその他多くの現代ロシア作家の作品をどし々
々々が文壇に紹介すると云ふ事は、非常に意味のある事ではないかと思ふ。」

一九一三年四月十三日

譯者識

「閣下午後一時で」

大臣はひどく肥つた人で、卒中の素因があつた。で、何でも危険な情の激動をさせてはならぬと云ふ所から、人々は彼の生命に關する或る重大な陰謀の企てられて居るのを知らせるのにも、非常に細かな注意を拂つた。人々は先づ彼が其の報知を平靜な態度で受け取つたのを見て、始めて委細の事情を明した。其の陰謀と云ふのは、明日閣下が御報告をなさりに御出かけの折に企てられて居るのですとかう云ふのだ。既に探偵に嗅ぎ出されて警戒されて居る數名の

欠

欠

死刑の宣告

警官の話が本當になつた。爆裂弾やピストルや爆發械を携へた、男三人、女一人、都合四名のテロリストは、家の階段の前で捕まつた。ついで同類の女が今一人、道具を拵へ、共謀の企てをした自宅で擧げられた。多量のダイナマイトや様々の武器も其處で發見された。五人共皆若かつた。男の一番年上が二十八、女の若い方が十九。就縛後彼等は獄内で審問された。殘酷な時代の例として、手早く、秘密に審問された。

法廷では五人共おとなしくして居た。が、心を痛め、思ひに沈んで居るやうにも見えた。無用な笑顔や、作り元気で、自分達の大膽な顔を見せびらかさうなどとは思はなかつた。それ程彼等の裁判官に對する輕蔑の念が大きかつた。他人の惡意ある視線に對して、自分達の心の奥を守り自分達の苦しみの深みを護るに足るだけの平靜な態度は彼等と雖、持して居た。審問に對しては、時には答へることを拒み、時には素氣なく、簡單にきつぱりと答へた。まるで相手は裁判官でなくて數字の表を求めて居る統計學者で、いもあるやうな調子で答へた。彼等のうちの三人——一人の女と二人の男だけは本名を云つたが、残る二人は法廷ではまだ知られて居ないのに、ど

うしても本名は明さなかつた。事毎に彼等は重病に罹つた人とか、又は或一つの疑り固つた觀念に囚はれた人とかに特有な、好奇心の薄いつまらなさうな様子を見せた。彼等は時にチラリチラリと素早い視線を放つたり面白さうな言葉を捉へて見たり、又は自分達の考へ事に戻つて、元のまゝの一點に思ひを集めたりした。

裁判官に最も近く着席して居たのは、名をセルゲイ・ゴローフィンと云つて、退職大佐の息子で、前には陸軍士官になつて居た事もある。年は至つて若く、肩幅の廣い、そして牢屋に入つて居るやうが、死ぬ事がきまつて居るやうが、少しも頬の色を曇らしたり、碧い眼中の樂しげな罪のない表情をなくしたりするやうな事のない程強い

男だ。審問の間ぢう、彼は生したてのまだ慣れない、濃いブロンドの鬚をひねり廻し、眉をしかめながら、ヂツと窓を見つめて居た。

冬は半ばを過ぎて居た。吹雪がしたり、灰色の寒い日が續いたりする間にも、何となく春の近づくやうな氣配がして、時々はその先驅かと思はれるやうな、暖い明るい日もあり暫しは威勢の好い小雀などが、嬉しさに氣も狂はんばかり街を飛び廻つて、人までが酔ふたかと思はれるやうな、心ゆくばかり若やいだ、かゞやかしい時もあった。去年の夏の埃に汚れたまゝのあの高い窓からも、もう不思議な美しい春の空が見られた。一寸見ると、空は薄曇つて、乳色がゝつた灰色のやうであるが、よく見直すと、淡青の繪具で塗つたや

うにも、又は濃い〜藍色、澄んだ涯のない藍色で塗つたやうにも見える。而もその藍色は俄に剥けてしまふやうな事がなくて、雲の透き徹つたベールの中に程よく包まれて、まるで花嫁でも見るやうに仰ぎ見る人の心をとろけさせた。セルゲイ・ゴローフィンは此の空を眺めやつて、鬚を引きむしり、長い、しつとりした睫毛の中で兩眼を交る〜しばだゝいては、人知れぬ深い物思に沈んだ。ふとして、指をせわしく動かし、何か知らたまらなさうな幼い嬉しさを顔に見せたかと思ふと、また周囲を見廻はすと共に、その嬉ばしさも、燃え上る石炭の上を踏みつけてでもしたやうに、直に消えてしまつた。と、最う見て居るうちに、殆んど何の猶豫もなく、その美し

い頬の色は、まるで死人のやうに蒼くなり、たまらなさうに引き抜かれた美しい一筋の髪の毛が、血の氣のなくなつた指先に挟まれて、萬力にでもかけたやうに締めつけられた。でもまだ此の世の喜びと、春の嬉しさは強く彼の心の奥に動いて居た。で数分時の後には其の若々しい顔は再びもとの幼い表情に歸り、眼は再びかの春の空を求めた。

その空の方を同じく、ムスヤと緯名された本名の知れぬ少女が見て居た。年はゴローフィンよりは若いのだが、眼付がきつく横柄な所から、却て年上のやうにも見えた。でも、その頸筋のほつそりしたあたり、手首のなよ／＼しいあたりには、何か知ら捉へんとして

捉へ難き若々しさが表はれて居て、それが又、好く調子の調つて居る立派な樂器のやうな、はつきりした、透き徹つた、ふくよかな其の聲のうちにも響を傳へて居る。ムスヤは顔色がひどく蒼かつた。そしてその蒼い色は、心の底に熱烈な焔を包んだ人々に特有な、白熱したやうな蒼い色であつた。彼女は殆んど身じろぎもしなかつた。たゞ時々見えるか見えない程の身振をして、その右手の中指について居る深い何物かの痕を探つた——その指環の痕も近頃は失くなつて居た。彼女はいかにも落ち着いた、無關心の態度で空を見つめた。が彼女の空を見つめたのは、唯何となく此の平凡な汚ない部屋の中の物と云ふ物が、悉く自分に敵意があつて、何だか自分の顔

を詮索するやうに思はれてならなかつたからだ。彼女が信用して見る事の出来る純潔な眞實なものとは、眞實あの青い空の一片だけなのだ。

裁判官はセルゲイ・ゴローフィンを憐み、ムスヤを憎んだ。

ムスヤの次に席を占めて居るのは、ウエルネルと綽名された、同じく本名の知れぬ男で、両手を膝の間に組み合せて、矢張ジツと身動きもせず居るが、何となく其の容態に氣取つた所がある。今假に重たい戸に門をかけるやうに人の顔にも門が掛けられるものとするば、此の名の知れぬ男は自分の顔を鐵の戸のやうに門をかけたのに違ひない。彼は今ヂツと床を見つめて居る。一體心は静かなのか、

騒いで居るのか、何か考へて居るのか、巡查の證明を聽いて居るのか、一向分らない。身の丈はどちらかと云へば低い方だが、容貌は美しく上品である。何となく深い落ち付いた力、冷やかな圖太い勇氣の印象を與へる。はつきりとした、丁寧な受答をする様子がいかにも禮義正しいが、口振がいかにも險呑らしい、他の囚人に着せると、可笑しげに見える規定の外套も、彼に着せると左程眼にも立たず、全く性に合はぬ服装とも思へなかつた。他の仲間が爆裂彈や爆裂機を携へて居たのに、ウエルネルは僅に見すばらしいピストルを持つて居たに過ぎなかつた。それにも拘らず裁判官は彼を目して首領となし、扱ふにも幾分の敬意を拂ひ、彼が裁判官に對して行ふと同

とある

じ省略を行つた。

ウエルネルの次に居たのは、ワシリー・カシーリンと云ふ男で、死の堪へ難い恐怖と、而もその恐怖を和らげて裁判官には見せまいとする望みなき望との間の、恐ろしい心の悶えに苦しんで居た。朝囚徒等が法廷へ引き出されてからと云ふもの、彼は胸の動悸の烈しさに息も詰りさうになつて居た。汗の玉が絶えず額に浮んだ。手は濕つて冷たくなる。じめくじめた氷のやうな襯衣が肌になべり付いて身動も出来ぬ。人間以上の意力を奮ひ起して、彼は指の震へを抑へ、聲の緊りと節調を保ち、凝視の平静を保つた。身のまはりの物は何一つ見えない。聲は聞えるには聞えるが、それがまるで霧の奥から

でも来るやうな氣がした。それ所ではない。自分自身が答をはつきりと聲高く云はうとして一生懸命に、こはやるそれすらもまるで霧の中のやうにぼんやりして居る。その癖、云つた後から問はれた事も、云つた事も忘れてしまふ。と、又無言の恐ろしい苦悶が初まる。で、最早死は此の男にとつては裁判官が眼を彼から外らした程に明らかなる事實であつた。此の男の年をきめるのは、まるで腐つた死骸の年をきめるやうなもので少しも見當がつかなくかつた。尤も彼の書類によるとまだやつと二十三だと云ふ事であつた。ウエルネルは二度、彼の膝を軽くつゝいて見たが、その度彼は簡単に答へた。「何でもないさ」

だが、突然、まるで狩り立てられた野獣のやうに、わけのわからぬ事を叫んで見たくて堪らないやうな氣になつたのには、彼も一番つらかつた。で、今度は、こちらからウエルネルを一寸つゝいた。併しウエルネルの方では、眼もくれないで、低聲に答へた。

「何でもないよ。ワシア、すぐ済んでしまふさ」

心配のあまり、ターニヤ・コワールチュクと云ふ、第五番席に着席したテロリストは母親らしい風で、仲間の者をかばつた。まだ年も至つて若く、頬の色もセルゲイ・ゴローフィンのやうに濃く美しくかつたそれで居て被告一同の母で、るやうに、その様子、その笑顔、その心づかひ、凡てにやさしい心遣りと限りない愛情が籠つ

て居た。聲をふるはしはせぬか、後れを取りはせぬか、水を飲ませてやらなくても好いか、たゞもうその事ばかり氣にして仲間の云ふ事を聽いて居た。

だが彼女はワシヤの方だけは見るに忍びなかつた。彼の苦しみ方はあまりに烈しい。彼女はたゞせんなさに指を折りまげて音を出して見てそれで心をまぎらして居た。ムシヤとウエルネルとを眺めて、彼女は誇らしい、尊げな讚美の念に撲たれ、顔つきもどことなく改まつた、眞面目な色を帯びて來た。セルゲイ・ゴローフィンに對しては、笑顔を浮べて先方の注意を引かうゝとした。

「まア、あの人と云つたら、空を見てるんだよ。あれ！　あれ！」

先方の眼の行き所に気が付いたので、彼女はかう腹の中で思つた。

「だのにワシヤは？ あゝ、あゝ、どうしたと云ふんだらう……どうしたら慰められるのだらう？ 何とか云つてやりたいけど、そんな事をしたら却てよくなからう。あの人は泣き出すに違ひない」

漂ふ雲をのがさず映す静かな池のやうに、彼女のやさしい、晴々した顔は、ホンの一寸の間ではあるが、四人の仲間のありとあらゆる感情、ありとあらゆる思ひの影を映した。彼女は、自分も同じく審問されて居り、やがて絞殺されるのだと云ふ事を忘れ去つて、全くもう平氣になつて居た。爆裂弾やダイナマイトが発見されたのは、彼女の住居ではなかつたか。不思議なやうだが、警官の來た時

にピストルを放つて、一人の警官の頭に負傷させたやうな騒ぎまでして戦つたのは彼女ではなかつたか。

審問は八時近くに終つた。日は丁度暮れかゝつて居た。刻一刻、セルゲイとムスヤの眼の中に、碧い空が影を消した。紅くもならず、微笑みもせず、さながら夏の夕暮のやうに空は徐々に薄暗くなり、灰色になり、やがて突如として寒くなり冬らしくなつた。ゴローフィン太息をつき、手を伸ばし、眼を上げて窓を見た。そこにはもう夜の冷めたい暗闇が姿を現はしつゝあつた。相變らず鬚をひねりながら、彼はターニヤ・コワールと笑顔を交しつゝ、裁判官や、兵隊や、それらの人々の武器をチロ／＼と見初めた。ムスヤは

と云ふと、口が全く沈んでしまつても眼を地面へは俯向けずに、とある天井の片隅へと轉じた。そこにはストーブから立ち上る暖氣の眼に見えぬ流動に煽られて、蜘蛛の巣がゆらくと揺れ動いて居た。彼女はいよゝゝ宣告が下されると云ふまでヂツとそれを見つめて居た。

辯論が濟んでから、罪人共は、辯護人等のぼんやりした、氣の毒さうな、當惑げな顔付を見ないやうに見ないやうにして暇を告げたそれから暫く戸口の所に集つて、二言三言互に言葉を交し合つた。「何ともないよ。ワシヤ。ちききに最うお終になるんさ」とウエルネルは云つた。

「だが僕にや何の事も無いよ。なア」力の籠つた、穏やかな、殆んど嬉しさうな聲でカシーリンが應じた。眞實、彼の顔も今は稍色を帯びて、死人らしい所などは最早なかつた。

「畜生ッ！　とうとうやつつけやがつた」ゴローフィンはいかにも子供らしく罵つた。

「そりや初めから解つてた事なんぢやないか」と苦もなくウエルネルは答へた。

「明日は判決が云ひ渡される事でせう。したら妾達は皆同じ監房に置かれるやうになるのだ」とターニヤは云つて、仲間を慰めるやうに「執行までは皆一緒に居られるんだわねえ」

音もなく、だが決然たる様子で、ムスヤは歩き出した。

「俺は殺される譯はねえぞ」

テロリスト事件のあつた二週間前のこと、裁判官は違つて居たが同じ法廷で、百姓イワン・ヤンソンが審問され、死刑を宣告された。イワン・ヤンソンは或る有福な百姓の作代に雇はれて居た男でどう見ても同じ階級の他の奴等と比べて少しも異つた所はなかつた。生れはエッソニヤのウエーゼンベルグで、數年間此處の農場、彼處の農場と渡り渡つて、次第に都の方へ近づいて來た。彼は殆んどロシ

ヤ語は知らなかつた。近くに一人として同郷人の住んで居るのにも遇はず、主人は主人でラザレフと云ふロシヤ人であつたから、殆んど二年と云ふもの、ヤンソンは無言のまゝで通した。人間にも獸にも一言も口を利かなかつた。馬を洗ひに連れて行くにも、又それに鞍を置くにも一言も口を利くでなく、たゞもう小股のおどぐしした足取でのそり／＼とついて歩いた。馬が驅け出しても、ヤンソンは一言も口を利かなかつた。その代り例のすばらしい鞭でたゞ無茶苦茶にぶんなぐつた。酒を飲むと、鈍くて而も性の悪い強情な性質が憤怒となつて現れるのが常であつた。彼のピシ／＼云ふ鞭の音と小舎の板の間を踏む間の合つた、厭な木靴の音とは、母屋までも聞え

た。あまり馬をいぢめるので、主人はその罰として始めはヤンソンを打つたが、とても利目がないので、それも止めてしまつた。

月に一二度は、きまつてヤンソンは酔拂つた。殊に主人を停車場へ送つて行く時は、それがお定まりだつた。主人が汽車へ乗り込むとヤンソンは、馬をいくらか驅り戻して置いて、汽車の出るのを待つて居た。やがてその後を見送つて、再び停車場へ戻つて、その酒場でたらふく引つかける。さうした揚句、今度は七里の間を駆けつけに馬を駆けさせて歸つて来る。みじめな、獸を情容赦もなく打ち叩き、手綱も取らずに、何の事か譯のわからぬエッソニヤ語の文句を歌ひつゝ、わめきながら歸つて来る。時には口をつぐんだまゝ、

云ふに云はれぬ腹立たしさと、苦しさと、のぼせ心とに驅られて、まるで狂氣じみた滅盲法の所行を演ずる。往來人には眼もくれず、其代り別に悪口をつくでもなく、上りでも下りでも關はずたいもう無暗とやけな歩みをつゝけるのだ。

主人は彼を追ひ出したがつては居たが、何分にもヤンソンは別に高い給金をねだるではなく、おまけに他の雇人仲間と比べてさまで劣ると云ふでもなかつたので、矢張そのまゝにして居た。

或日彼の許へエッソニヤ語で書いた手紙が來た。が、元來當人たる彼は読み書きは知らないし、それに誰一人としてエッソニヤ語を解する者は居ないと來て居るので、その手紙が故郷からの消息をも

たらし居るなど、云ふ事は一向氣もつかぬと云つた風に、ヤンソンは味も素氣もなくそれを掃溜へ放り投げてしまつた。多分女が欲しかつたのだらう。彼は又農場に雇はれた娘に縁談を持ちかけて見た。所が手もなく肘を喰つてしまつた。無理もない、元來が丈低のしなびた小男な上に、見るも恐ろしい雀斑が一面にこびりついて居ると云ふ御面相なのだから。でとう／＼それもあきらめてしまつた。一體彼は口は利かなかつたが、その代りいつも何物にか耳を傾けて居た。雪を積み上げた塚の列かなぞのやうに凍てついた肥鶏の點在する、荒涼たる雪の野に耳を傾けた。一面に藍色をばかしたやうな澄み渡つた空の彼方に耳を傾けた。鳴り響く電柱に耳を傾けた。

野原や電柱の云ふ事は、ひとり彼のみ知つて居た。彼は又人々の話人殺や掻浚や放火などの噂にも耳を敬てた。

或夜、村では、寺の小さい鐘が絶え入りさうな、物哀れな音で、鳴り出した。火焰があちらにもこちらにも見えた。近くの農場を荒らして居るのにも拘らず、誰一人犯人らしい者は知れなかつた。彼等は主人を殺し、妻を殺し、家に火をつけた。ヤンソンの居た農場の人々も、その爲めにひどく不安に感じ出した。晝となく夜となく犬は鎖から放され、主人は寢床の手近に鐵砲を置いた。主人はヤンソンにも、とある古い武器を持たせたく思つたが、ヤンソンは一寸それをひねくつて見て首を振つて突き戻した。それでも主人はヤン

ソングがこんな錆だらけの古臭い機械よりも自分の持つてたフィンランド刀の切味をどれ程多く信用して居たか知らなかつたのだ。

「こんな物が何になる、却て此方が打殺されるだけだ」と云ふイワンの言葉に答へて

「イワン！ おぬしや間拔けた事ばつか云ふだ」と主人は云つた。

所がある冬の夜の事、他の作代が停車場へ行つて居ない間に、その鐵砲を見てびくついた事のあるイワン・ヤンソンが、殺人と強姦未遂と云ふ大罪を犯すやうな事になつた。おまけに彼はそれ等の大罪を何の苦もなくやつつけたのだ。先づ死人のやうにいぎたなく眠り込んで居る下男を臺所へ閉ぢ籠めて置いて、蔭の方から主人へと近

寄つて、脊中から滅多衝に衝き刺した。主人が氣を失つてパツタリ倒れると、女房は泣きわめいて部屋中を駆け回り出した。齒を剃き出し、刀を逆手に持つて、ヤンソンは靴や抽斗を引掻き廻した。で、いくらかの有金を見つけ出すと、今度は初めて女房に眼が付いたと云ふ風にくわつとなつて前後不覺に、手込めにしやうと突かゝつた。と、其拍子にふと手に持つた刀を落した。所が女の方が強かつたので、抵抗どころか、ひどくヤンソンを絞め上げた。時も時主人は息を吹き返し、下男は臺所の戸を破つて出て來た。ヤンソンは逃げた。それから一時間程して、小舎の隅にちこまつて、擦るとは消え擦るとは消えするマッチをやけに引擦つて居る所を、とう／＼家の人

に見つけられて捉まつてしまつた。屋敷に火をかけやうとして居たのだ。

四五日して主人は死んだ。ヤンソンは審問されて、死刑の宣告を受けた。噂によると彼は法廷で自分の裁判がどんな風に進行するかも知らずに、たゞぼんやりとして大きなすばらしい部屋を眺め廻し汚ないともなんとも思はずに皺だらけの指で鼻をほじくつて居たと云ふ事だ。たゞ以前日曜日の教會で彼を見た事のある人達だけは、多少あれでもオツクリをしたのだらうと勤付く事が出来た。頭には薄汚ない紅の襟巻を巻きつけ、髪は所によると艶々しく真黒になつて居り、又所によるとまるで鍬も入れぬ、荒れ果てた野原のやうに

薄い、疎な束を成して居た。

絞殺に處すると云ふ宣告が申渡された時に、ヤンソンは急に色を動かした。真赤になつて、何だか現在首でも絞められて居ると思つたやうな恰好に襟巻をほどいたり結んだりし出した。と今度は何の事かわからずに両手を振つて、宣告を読み上げた裁判長に向つて云ひ放つた。

「私を殺すやうに云つたなアあの女だつべえ」

「あの女? 誰の事かな」裁判長は深い胴間聲で訊ねた。

ヤンソンは裁判長を指さして、偷目にその方を見ながら、腹立たしさうに答へた。

「汝様さ」

「成程」

と今度は他の裁判官の一人に目をくれて、いかにも加勢を求めやうな様子で先刻と同じ事を云つた。

「あの女が私を絞め殺すと云つた。俺ア殺される譯がねえぞ」
「被告を連れ出せ！」

それでも相變らずヤンソンはビクとも動かぬと云つた風な威張つた調子で同じ言葉を繰り返した。

「俺ア殺される譯がねえだ」

そればかりでなく彼が徒づらに威張つた風を見せやうとして突張

つた手先、しかめた顔も何の甲斐もなく、却て彼を引つ張り出す時に、看守が法の違反と知りつゝも、低い聲でこんな事まで云つた程に、外目には馬鹿げて居た。

「何て、大馬鹿野郎だ、手前は？」

「俺ア殺される譯がねえぞ」ヤンソンは執拗く云ひ張つた。

これまで一ヶ月も閉ぢ籠められて居た監房へ再び彼は押し込められた。打たれる事と云はず、ブランドーと云はず、塚に似た圓い丘の起伏する荒涼たる雪國と云はず、何物にもちきに慣れ易い彼は、監房にも慣れて居た。で、再び自分の床や、格子窓を見るのが嬉しいやうな氣さへした。當てがはれた食事を食ふのが嬉しかった。無

理もない朝からまだ何も食はなかつたのだ。たゞ癪に障るのは法廷であつた事だ。何と思つて好いか最う分らない。絞め殺されるのはどんな事かすら分らなかつた。

看守は紋切型の調子で彼に云つた。

「どうだい、大將、とう／＼手前も絞罪かな」

「だけれど、俺ア何時絞められるだね」

さも分らないと云つた調子で彼は尋ねた。看守は一寸考へて

「待つてくれえよ。何でも連があるに違ひない、一人づゝやつけるなア面倒だからな。それに手前のやうな小つぼけな奴アなほ更だでなア」

「んぢや、何時だね」とヤンソンは頑張つた。面倒臭いから一人は殺さないと云つたのに對しても、彼は別に腹を立てなかつた。彼はどうしても自分の殺される事は眞實にして居ないのだから、今の話を聞いて、何でも此奴ア殺すのを延ばして置いて、俺を赦してくれるのだとばかり思つた。

「何日かなア。何日かなア」と看守は言葉を次いで「犬をやつけるのとは違ふでなア。これが犬なら納屋の蔭へ引張つて行つて、ガアンと一つ喰はせりやそれで濟むんだが！手前だつてさうはされたくあるめえしなア、奴さん」

「あんでまア、そねえな事されてたまるものか。あの女に違えねえ

俺を殺さうてな。あんと云つたつて、俺ア、俺ア殺されるなア厭だぞ」

かう云ひ放つてから、彼は生れてから始めてのやうな笑ひ方をし
て笑ひ出した——ゲラ——と埒も無い笑ひ方だが、何だか氣味の悪い程はしやいで居る。まるで鷺鳥が鳴き出したやうだ。看守は呆氣
に取られてヤンソンの顔を眺めて、眉をひそめた。死刑を執行される迄になつて居ながらも、なほ且此奴のやうに斯う馬鹿笑ひをする
と云ふのは、何だか監獄を馬鹿にし、絞殺臺をすらも馬鹿にし、更に其等の物を屁でもない物にしてしまつたやうな者だ、かう看守は
苦々しく思つたのだ。と急に何だか老看守——殆んど一生涯牢屋の

中で暮らし、自然の法則を考へるやうに牢屋の法則ばかり考へて來た——此の老看守の眼に、監獄も世の中の凡ても等しく一種の狂人病院のやうなもので、看守はその狂人の親方なんぢやないか、と云ふやうに見えて來た。

「罰當りめ」と彼は云つて、地面へ唾を吐きながら「何故手前はさう笑ふのか。此處は居酒屋ぢやねえぞ」

「だとして俺ア、俺アはア殺されるなア厭だもんなア。ハッハッハッ」
ヤンソンは續けざまに笑つた。

「悪魔！」と看守は應じて、十字を切つた。

夜中ヤンソンは平然と、どちらかと云へば嬉しさうにして居た。

「俺ア殺される譯がねえぞ」と云つた言葉を、彼は繰返しく云ひ續けた。聊かも心配などはないやうに、いかにも動かし難い、押しの強い調子で續けた。彼は夙にもう自分の犯した罪状は忘れて居た。時によると女房を手籠めにできなかつたのを残念に思ふ位の者であつた。それも最うなくなつて、今では何事も思はなくつた。

毎朝ヤンソンは俺は何時殺されるのだと訊ね、毎朝看守は腹立しさうに

「まだゆつくりしろ」と答へて、ヤンソンの笑ひ出さぬ前にと、さつさと逃げ出した。

此の相變らずの言葉の交換に喜んて、ヤンソンは死刑執行は決し

てない事と思ひ込んだ。来る日も来る日も、朝から晩までヤンソンは、雪にうづもれた野原や、停車場の酒場や、さては又更に遠い、更に輝やかしいさまぐの物事を、ぼんやり夢みながら寝て暮した。監獄の食ひ物が好いので、彼は肥つた。

「これなら彼女も惚れるだつて」主人の女房の事を思ひながら、彼は獨ごつた。「今ぢや俺だつてあの亭主の野郎に負けねえ程肥つてるだもん」

彼はたゞ一つ望があつた——ブランデーを飲んで、勢一杯の速さで馬を追ひこくつて往來を氣狂のやうに驅りたい事だ。テロリストの連中が逮捕されると、その噂が監獄中へ傳はつた。

或日ヤンソンが例の通りの問を試みると、看守は不機嫌な聲で無愛想に答へた。

「ちきで。一週間以内だらうよ」

ヤンソンは蒼くなつた。ガラスのやうな眼玉は眠つたやうに、ぼんやりして來た。

「からかふだつべ」と彼は訊ねた。

「手前は以前は待ち遠しいやうな口振をして居たのは、今日に限つて冗談だなんて云ふんだな。冗談は此處ぢや禁物なんぢや。冗談が好きなのは手前だ。吾々は冗談は云ひはせんぞ。」と容態を作つて看守は答へて立去つた。

夕方になるに隨てヤンソンは、瘦せて來た。四五日の間にすべこくなつた彼の皮膚は小皺だらけになつた。何事にも彼は無頓着になつた。身動きが鈍くなり、首を動かすのも手を動かすのも、歩くのも、凡てが初めてみつしりと教はらなければならぬむづかしい仕事のやうになつた。夜中ヤンソンは寢床の上に横になつては居たが、眼は閉ぢなかつた。朝までパツチリ明いて居た。

「オヤ！」翌朝看守がその様子を見て叫んだ。

新らしい、結果の好い實驗を爲し得た大學者のやうな満足をもつて看守は細密に且手落ちなく罪人を試験した。何事も例の如くに進行した。悪魔は全身に恥しさを浴びた。監獄の神聖と、絞首臺の神聖

とは、もとの如くに確保せられたのだ。應揚な、どちらかと云ふと
しんみりした憐憫の態度で、老人は訊ねた。

「誰かに遇ひたくはないかな」

「なせね？」

「暇乞ひをするのにさ。解つてるぢやないか……早い話が母親にと
か、それから兄弟にとか」

「俺ア殺される譯ねえだよ」とヤンソンは低い聲で云つた。「俺ア殺
されるなア厭だもん」看守はその顔を見て、一言もなかつた。

ヤンソンは晩は幾分落着いた。いつもの通りだ。あの通り曇つた
冬空がいつものやうに輝いて居るではないか。あの通り馴れくし

げに廊下の足音や話聲が聞えるでないか。彼は刑の執行を眞實と思
ふ事をやめた。以前は夜は彼にとつて、たゞ闇の時であり、眠りの
時であつた。然るに今はその神祕な物恐ろしい本體が彼の心に觸れ
て來た。死を信じないと云ふには、どうしても身邊に日常生活の過
程を見もし聞きもせねばならぬ。足音然り、人聲然り、光線然りで
ある。所が今は物と云ふ物悉く彼には異常に見えた。此の沈黙、あ
の物の影、それが既に死の姿のやうにも思へる。それが既に避けん
として避け難き死の肉迫のやうな氣もする。心の亂れに彼は既に絞
首臺の第一段を攀ぢたのだ。

その日、その夜、希望と恐怖とはこもく彼に來つた。かくして

夕暮——かの避くべからざる死が三日の後の、日の出と共に襲ひ來る事を感じもし、知りもした——その夕暮となつた。

彼は未だ曾て死ぬと云ふ事を思つた事がなかつた。死は彼にとつて何の形もなきものであつた。然るに今はその物が自分の監房に入り來つて、驅づり廻つて自分を探して居ると云ふ、苦しい感じに襲はれて居るのだ。それをのがれたさに彼は驅け出した。

部屋はどの隅もどの隅も彼を真中へ真中へと突戻さうとして居るやうな氣がする程に狭かつた。彼は何處へも身を匿して見やうがなかつた。幾度となく體軀を四壁にぶつけた。一度などは扉へ思ふさまぶつかつた。よろめき倒れて、地面へ顔をこすりつけた。死神が

攫みかゝつたやうな氣がした。床にしがみつぎ、汚ない、眞黒なアスハルトに顔を押し付けて、ヤンソンは誰か助けに來たまで怖ろしさに叫びつゝけた。皆が彼を起し上げて、寢床の上に坐らせ、冷水を注いでも、彼は眼を開かうとはしなかつた。やつと片眼を細くあけて、部屋のがらんとした明るい隅の方を見たかと思ふと、又しても叫び出した。

だが冷水の効驗はあつた。それに例の老看守は幾度も幾度も親父らしい風で軽く頭をゆすつた。此の生きた感じが、死の思を追ひのけた。ヤンソンはそれから夜明まで熟睡した。仰向に寝て、口を開けて大きな長い鼻をグウ／＼かいた。半ばふさいだ臉の間には、

白ちやけた、平べつたい、瞳の見えぬ眼が外から見られた。

それからと云ふもの、晝も、夜も、人聲も、足音も、菜汁も、ありとあらゆる物が、彼には物凄く驚きの中へ誘ひ込む一帯の恐怖となつた。彼の弱い心は、明るい光やキャベツと、二日後に死ぬといふ事實との間の恐ろしい矛盾を調和するに堪へなかつた。無念無想時間の勘定さへもしなかつた。彼はたゞ最う、彼の頭を悩ます此の矛盾——今日の生と明日の死との——此の矛盾に對する沈黙の恐怖の掬となり了つた。食ひもせず眠りもしなかつた。夜びてぶる／＼顛へながら腰掛の上に胡座をかいたり、かと思ふと忍び足で部屋の中を彼處此處と歩いたりした。彼は驚きのあまり氣拔けしたらしく

極つまらない物を手にするにも、先づそれを怪訝さうに調べるやうになつた。

看守共も彼に注意を拂はなくなつた。彼の状態は普通の罪人と少しも變りはなかつた。典獄は自分が経験した事がない癖に、それを根棒でぶつ斃した牛のやうな様子だと云つて居た。

「彼奴は目がくらんで居るんだ。あれでもう死ぬる間際まで何にも感じないだらうよ」と看守は云つて、熟練した眼光で彼を検査しながら「イワン聞えるか。おい、こら、イワン」

「俺ア殺される譯がねえぞ」とヤンソンはぼやけた聲で答へた。下顎がガツクリ落ちた。

「手前が人を殺さへしなけれや、誰も手前を殺さうなと思はな
いんだ」と嘲けるやうに、勳章をつけた、位の高い、年の若い看守
長が云つた「盗みをしたり、人を殺したりして置いて、手前は殺さ
れたくないア、餘り度胸が好すぎるよ」

「俺ア殺されるなア厭だ！」とヤンソンは答へた。

「成程、殺されたくはない、そりあ汝の勝手さ。だが、まアそんな
馬鹿な事を云つてないで、身の廻りの物でも始末したが好からう。
屹度何か持つてるだらう」

「此奴何にも持つては居ないのですよ。シャツ一枚にツボン一着
それに毛帽子！」

こんな風にして木曜日まで日を送つた。とその木曜日の、而も眞
夜中に、多勢の人数がヤンソンの監房へ這入つて来て、その中の肩
章のある一人が彼に向つて云つた。

「用意しろ。もう出掛ける時間だ」

相變らずグズリぐくとけたるさうにヤンソンは持物を残らず身に
纏うて汚ない肩掛を頸に巻きつけた。それを見守りながら巻煙草を
燻らして居た肩章の人は、助手の一人に云つた。

「何て暖かいんだらう。春だね」

ヤンソンの眼は閉ぢた。まだ全くの眠り心地で居るのだ。看守は
怒鳴りつけた。

「サアサア。早くしろ。手前は眠つてゐるんだな」と、突然ヤンソンは居眠りのコクリ〜を止めて、「俺ア殺される譯がねえだぞ」と不精不精に云つた。彼は肩を窄めておとなしく歩き出した。庭へ出るとしつとりと濕つた春の空氣が不圖身にしみた、澆水が出だした。雪解がして居る。絶え間なく、水の滴りが樂しげな音を立て、落ちて居た。憲兵共が身を屈め、劍をガチャつかせて馬車へ乗り込む間、ヤンソンはものうげに指で以て流れ出る涙を擦つたり、締りの悪い肩掛を直したりして居た。

オリヨール生れ

ヤンソンを審問した法廷は同じ開廷間にチゲーンのミチカと云ふ通名のエレッツ州オリヨール縣の小百姓ミカエル・ゴルトベツツに死刑の宣告を與へた。告發された最近の罪狀と云ふのは有罪とするに有力な證據のある、三人殺の強盜であつた。が、過去の事は知れて居なかつた。尤もチゲーンがさまざまな他の殺人事件に關係して居たと云ふ事についての、信するに足るべき徵證もあるにはあつたが、いかにも漠としたものであつた。至極眞面目な打ち明けた態

度で彼は自分を強盗だと言つた。そして流行に倣つて大袈裟に「盗賊」だなど、自稱するやうな奴らを瞳若たらしめた。彼は最後の犯罪については、快く枝葉までも話したが、少しでも過去に關した事となると、きまつて答へた。

「野原に吹いとる風に訊いて見てくんなせえ」それをも無理に聞き糺さうとすると、チゲーンは急に力味上つた、眞面目な様子に返つて

「オリヨール生れの者ア皆氣が荒えだ。世界中の泥棒の本家本元でござす」と落ち着き拂つた裁判口調で云ひ放つた。

彼がチゲーンと綽名されたのは、人相と手癖の悪い事からであつ

た。彼は瘦せこけて居る上に、妙に色が黒かつた。頬骨はトルコ人のやうに突き出て居り、その突き出た頬骨の上を黄色な斑點が隈取つて居た。白眼をキヨロくさせるのが癖で、まるで馬のやうだつた。眼つきがすばしこく鋭くて、絶へず何かを探すやうで、身振ひさす程凄かつた。そのすばしこい眼に一眼睨まれた物は、何か知らず中身を失くし、彼に降伏して形を變へるやうに思はれた。誰やらが巻煙草を彼に睨まれたわけで、それが最う彼の口へでも這入つたもの、やうに思つて氣後れして吞めなかつた事があつた。變幻自在な彼の性質は、たつた今まるめたハンカチーフのやうにわぐなつて小さくなつたかと思ふと、すぐに又火花の輪のやうに散り亂れてしま

ふ。水を飲ますとまるで馬のやうに一桶位は飲み干した。

裁判官が訊問すると、フィと首を擡げて、ためらふ隙もなく、満足げな様子まで見せて

「その通りです」と答へる。

時には語氣を強める爲めに「ル」と云ふ音を力強く巻舌に云ふ事があつた。

だしぬけに彼は飛び上つて、裁判長に云つた。

「口笛を吹かしてください」

「何故か」と判官は驚いて怒鳴つた。

「私が仲間へ合圖をしたと證人が云ひますだ。で、そのやり方を一

寸御見せ申さうと思ひました。素敵に面白うござすせ」

少々呆氣に取られて裁判長はその請を容れた。チゲーンは両手から二本づつ、都合四本の指をすばやく口へ當て、恐ろしげに目をギロつかせた。と見る間に、死んだやうな法廷の空氣は、全くの野性を帯びた口笛の音で破られた。その引き裂くやうな響のうちには半ば人間的な半ば野獸的な何物か、籠つて居り、犠牲者の死に行く苦しみに人殺しの蠻的な歡びと、脅かしと、呼はゝりと秋雨の夜の悲劇的なさびしさ暗さが籠つて居た。

裁判官は手を振つたので、チゲーンはおとなしくやめた。まるで音楽家がむづかしい曲を確かな成功を以て奏し終つた時のやうな恰

好で、彼は席に着いて濡れた指を着物で拭き、さも得意さうに傍聴席の方を見た。

「何と云ふ太い泥棒だらう」と裁判官の一人は耳をこすりながら云つた。併しチゲーンに似たトルコ人らしい眼つきをした今一人の裁判官は、泥棒の頭越しに夢見るが如く遠くを眺めやつて、笑顔に答へた。

「全く面白い」

一も二もなく裁判長はチゲーンに死刑を宣告した。

「當り前だ！」と宣告が言渡されると共にチゲーンは云つた。そして警護兵の方へ向いて脅かすやうな風で

「さア、おい歸るべい、奴さん。ふんだくられねえやうに鐵砲をしっかりと握りしめてけつかれ」

兵士は堅くなつて、おづくくと彼を見た。そして仲間と目くばせして、いざと云へばすぐにも撃たれるやうになつて居るかどうかと鐵砲をしらべて見た。他の兵士も同じ事をした。牢屋へ行くまで兵士共は歩いて居るのでなくて、空でも飛んで居るやうだつた。罪人の事ばかりに氣を取られて、道のことや天氣の事や、又自分達の事などは少しも心に留まらなかつた。

ヤンソンと同じくチゲーンは死刑の執行まで十七日の間牢屋に置かれた。その十七日と云ふ日數も、ほんの一日のやうに早く過ぎ去

つた。彼の心はたいもう逃亡と自由と生の只一念に充たされて居た。チゲーンの暴れ狂ふ剛頑な心は、壁や格子や何も見えぬ不透明な窓に抑へられて、その力はミチカ其人の頭を火のやうに燃やした。酒にでも酔拂つた時のやうに、明るい形を成さぬさまぐの心象が、彼の頭の中を飛び廻り、ぶつかり合ひ、さては何もかもませこせになつた。それが又わけもなく無暗と迅く飛び去り、翔り過ぎて其赴く所はいづれも逃亡と自由と生の一點であつた。絶えず馬のやうに鼻の腔を脹らませて、チゲーンは空気を嗅いだ。それが彼には何だか大麻や燐や濃い煙の臭を嗅ぐやうにも思はれた。さうでない、今度はまるで獨樂のやうに部屋中をぐるぐる廻り歩いて、壁を

しらべて見たり、指で觸つて見たり、高さを測つて見たり、天井を見つめたり、門を挽き切る事を想つて見たりした。彼の物狂ほしい有様は窓越しに見張をして居る兵士の惱みの因となつた。兵士は幾度も撃つぞと脅した。

夜のうちはチゲーンはグツスリと眠込んだ。殆んど身動きもしなかつた。動かないと云つても、それは活力に充ちた不動で、云はゞ一時泉が湯き出なくなつたやうなものであつた。だが、起き上ると見ると、すぐに最う計畫をしたり、探し廻つたり、しらべて見たりした。彼の手はいつもガサ／＼して熱かつた。ともすると彼の胸は溶けない氷の塊を入れられたやうに、急に凍りつく事があつた。

すると皮膚の面をつまげさまにゾク／＼と痙攣的な顫えが通つた。

こんな時は、生來の黒い顔が、青銅のやうな青黒い影を曳いて一層黒くなつた。と、得體の知れぬ痙攣が彼を囚へる。甘過ぎる物でも食つた時のやうに、彼は絶えず唇を舐めづつた。やがて、チュツと云はせて、齒を喰ひしぼり、かくして口の中へ溜つた唾をべつと地面へ吐き出す。彼はいつも言葉を皆まで云はずに止めた。考の飛び方の早さと來ては、とても舌などの追付きやうがないのだ。

ある日看守長は、兵士を連れてチゲーンの監房へやつて來たが地面に吐いてある唾を見て荒々しく云つた。

「どうだ、此の汚しやうと來たら！」

チゲーンはすばしこく答へた。

「なに、此のしかめつ面め、手前こそ世間を汚しやがつた癖に。

それでも俺ア手前にや一言も小言を云つた事ア無えんだ。それに何だ。どうして手前は俺にぐづく吐しやがるんだい」

同じ荒々しさで看守長は、絞刑人の役を彼に求めた。チゲーンは齒をむき出して、笑ひ出した。

「ふん、誰も無えと見えるな。そいつア悪かアねえ。ぢや今度は縊死人の所へでも行くが好えさ。あゝ、あゝ、首と繩があつても絞め手が無えとよ。まア／＼それも悪かアあんめえ」

「手前がやるなら、報酬に命は助かるだらうよ」

「聞きねえ、俺ア死んでからだつて絞殺人なんざア出来ねえだよ」

「それで、どうだと云ふんだ、好いのか厭なのか」

「そんぢやどうして殺つけるだか。こつそり息でも塞らせる位のものだらう」

「何の、音楽をやりながら絞めるんだぞ」と看守長は答へた。

「馬鹿野郎！ 音楽のある事アきまつとらア……こつそり息でも塞らせる位のものだらう」

「……」

かう云つて彼はうつとりさせるやうな歌を歌ひ出した。

「手前とうく本物のキ印になつたな、おい」と看守長は云つて「サ

ア、真面目に云へ、手前の考はどうなんだ」

チゲーンは齒をむき出して

「えらア急ぐだなア？ まアも少したつて来い。さうしたら云つて聞かすべい。」

したが、チゲーンの頭を掻き亂して居たごたくしたままとまらぬさまぐの心象にまた一つ新たな觀念が加はつた。「斬首吏となつたらどんなに面白いだらう！」新しい觀念とはそれであつた。彼はまぎくと心の中にその様を描いて見た。眞黒になつた人垣、それから斷頭臺——その上を彼即ちチゲーンその人が、赤シャツを着、手に斧をひつさげて、行きつ戻りつする。太陽は人々の頭を照し、斧の刃へ樂しげに戯れかゝる。今首を斬られやうとして居る者まで

がにこつく程に、ありとあらゆる物悉く楽しく陽氣な様を呈する。群衆の後ろからは馬車や馬の鼻面が見える。小百姓共がわざわざ町へやつて来たのだ。その又向ふはずつと野から野へつづく。チゲーンは唇を甜めて地面へ唾を吐いた。と思ひがけなく毛皮の帽子が口の上までも引落されたやうな氣がして、何もかも眞暗になつた。息がハア〜と云つて来た。胸は氷の塊のやうになつた。ゾクゾクする顫へが全身に傳はる。又しても看守長がやつて来た。チゲーンは齒をむき出して脅すやうに答へた。

「なんでそないに急いだ。も一遍戻つて来い」

とう〜或日、窓際を通りが、りに、獄吏は云つた。

「馬鹿野郎、とう〜運をにがしてしまひやがつた。他の奴が見つかつたんだぞ」

「畜生。手前がやれば好えた」とチゲーンは答へた。そしてもう其の仕事の花やかさを空想する事は止めてしまつた。

けれどもだん〜と所刑の口が近づくにつれて、ますます引き裂かれた心象の暴れ狂ふのが堪へられなくなつた。チゲーンは立ち止つて静かに待ちこたへて居たかつたのだが、暴れ狂ふ流はすん〜、彼を流し去つて何物を攫む隙も與へなかつた。ありとあらゆる物悉く渦巻いて居た。眼は亂され勝になつた。繪の版木のやうな恰

好の悪い、これ迄思つて居たよりは一層あらだしい、新らしい形のない幻影がごたくと浮んだ。それは最う流どころではなくて、限りもない高い所から絶えず落下する瀧のやうな、世界中が色となつて渦いて居るやうなものであつた。以前にはチゲーンは可なりに手入れをした口鬚だけしか立て、居なかつたが、監獄へ來てからは厭でも頬鬚も伸ばさなければならなかつた。その短かくて黒い、とげ／＼した頬鬚は、いやに寒れた顔付に見せた。流石のチゲーンも眞實の所、時々失心したやうになつた。何をして居るのか少しも分らずに、無暗と監房の中をグル／＼舞ひをして歩いて絶間なくザラ々々した粗壁を探つた。それでも矢張り馬のやうに多量の水をがぶ々

々飲む事はつゞけた。

或晩、皆がランプをつけて居た時、チゲーンは監房の眞中に大字なりに打倒れて、狼のやうに吼え出した。彼は已むを得ぬ重要な事のやうに、頗る眞面目にそれをやつた。肺の中へ空氣を一杯吸ひ込んで置いて、今度はゆる／＼と長く震へる呻り聲にしてそれを吐き出した。眉をしかめながら、彼はヂツと自分の其の聲に聞き入つた。その震え聲には多少氣取つた所があるらしく、不明瞭に呻るやうな事がなく苦悶と恐怖とに充ちた其の野獸の吼聲の一節々々をかつきり／＼と響かせた。

と、突然それを止めて、暫くは起き上りもせず黙つて居た。やがて

地面に向つて物でも云ふやうに、彼は囁き初めた。

「なア、おい。なア、君……なア、おい。……なア、君……穴があるわ……なア、おい、君」

一言云つては、彼はヂツとそれを聞いた。

と、跳ね起きて、今度はまる一時間も立て続けにしつこく悪口をついた。

「たゞ置かねえぞ、馬鹿野郎！」と叫んで、血走つた眼の玉をぐるぐる廻しながら「殺すなら、殺して見ろ……その代り何だ、馬鹿野郎！」

見張りの兵士は、白墨のやうに眞白になつて、苦しさと思しさに

泣いた。そして銃口で戸をつゝきながら、悲しい聲で怒鳴つた。

「うつぞ。ほら、好いか。うつぞ」

だが撃てはしなかつた。反抗でもしない限りは、死刑囚を撃つやうな事は決してないのだ。チゲーンは齒をギリ／＼云はせたり、悪口をついたり、唾を吐いたりした。生死を境する狭い欄の上に載せた彼の頭脳は、まるで乾からびた土塊のやうにめちやく／＼になつた。

夜中に人々が来て絞首臺へと連れ出しに來た時には、彼はやゝ生氣に復つたやうであつた。頬は色を帯び、眼にはいつもの悪だくみの氣配が、やゝ暴々しい光を見せた。で、彼は役人の一人に訊ねた。

「俺等を殺すなア誰だい。新前かな。それとも少しや慣れた奴かな」

84

「そんな事を氣に病むにや當らないよ」と問はれた人は答へた。

「なにツ？ 氣に病むなつて！ へん、殺されるなア貴方様ぢやござせんよ。私ですよ。そんな事ぬかすよりや、せめて二係締にシヤボンを儉約しねえようにでもしろい。代は政府が拂ふだよ」

「だまつて貰はうよ」

「此奴ア、見ねえ、あの通り牢屋中のシヤボンを獨りで使つたやうな面アしてやがらア。あのテラ／＼した面ア見ねえ」と番兵長を指しながらチゲーンは喋舌りつゝけた。

「黙れ！」

「シヤボンを儉約するなよ」

と、だしぬけに彼は笑ひ出した。足がしびれて來た。それでも彼は庭へ出るまでも怒鳴りつゝけた。

「おい。そこに居る奴さん。俺の馬車をもつと此方へ持つて來ねえ。」

「接吻しても口はきくなよ」

五人のテロリストに對する判決はいよく正式に發表され、即日認可された。罪人は刑執行日については何の沙汰も受けなかつた。

85

が、彼等はこれまでの例によつてその晩か又は遅くとも翌晩のこと
、豫想して居た。所がその翌日家族の者に面會をゆるされて、初め
て彼等の刑の執行の金曜日拂曉である事を知つた。

ターニヤ・コワルチュクには近い親戚は無かつた。たゞ知つて居た
のは小ロシヤに住んで居る遠縁の者位であつた。それも大方今度の
裁判も判決も何にも知らないで居るに違ひない。ムスヤとウエルネル
とは別に申し合はせた譯でもないが、二人とも親類に遇ひたいなど
ゝは云はなかつた。たゞセルゲイ・ゴローフィンとワシリ・カシー
リンの二人だけは、家族に遇ふ事になつて居た。面會時間が近づい
て居るのを思ふと、二人は最う何だか恐ろしいやうな氣がした。そ

れでもなほ二人は別れの言葉を取り交し、最後の接吻を拒むだけの
覺悟がつかなかつた。

セルゲイ・ゴローフィンは此の面會を悲しい事に思つた。父とも
母とも好く氣心が合つて居る上に、もう久しく遇はない。遇つたら
どうなる事かと思ふと心は恐しさの思に充ちた。時の流から別れ、
此の世から離れて見える絞殺と云ふ事の方が、かの面會の短い、分
のわからぬ間の事よりも、寧ろ手安く彼の想像にあらゆる其の恐し
さ、其の物狂ほしさを呈して描かれた。どうしやう。何と云はう。
至極簡単な平凡な身振——握手をし、體を抱き合ひ、それから「お
父さん御機嫌よろしう」と云ふ——さう云つた風な事が、何だか不

思議な、不人情な、狂氣じみたくだらない事のやうに思はれて、空
恐ろしいやうな氣がした。

ターニヤの豫期して居た通り、判決申渡の後は五人同じ監房に置
かれた。兩親が遇ひに来る迄、朝の間ちうセルゲー・ゴローフイン
は體軀を物哀れげに縮こめて、短い鬚をひねりながら部屋中を彼方
此方と歩き廻つた。時には、ふと立ち止つて、肺に一杯空氣を吸ひ
込み、水の中に永く居た游泳者のやうにそれを吐いた。だが、彼は
體が至極丈夫で、青春の牛氣が身内に漲つて居たので、かう云ふ激
しい苦しみの間でも、血は皮膚の下を循環り、頬は美しい色をし、碧
い眼は常の如き輝きを存して居た。

萬事思つたよりも工合よく行つた。退職大佐なる父ニコラス・セ
ルギエーヴィチ・ゴローフインは、誰れよりも早く面會人の溜へ入つ
て來た。顔と云ひ、髪の毛と云ひ、鬚と云ひ、手と云ひ、彼の身に
ついた何から何まで白づくめで、その白さが又どこもかしこも同じ
かつた。古いが、よく刷毛をかけてある着物は香水の香が高く、肩
章は新らしさうであつた。しつかりした歩調を取り、姿勢を正しく
して、彼は入つて來た。そして油氣のない、白い手を擴げながら高
い聲で彼は云つた。

「どうぢや、セルゲー」

父の後ろから母は小股で歩いて來た。妙な笑顔をして居る。それ

でも息子と握手をして、矢張高い聲で云つた。

「どうなの、セルゲイ」

母はセルゲイに接吻して、やがて言葉なく座に着いた。母はセルゲイが豫想して居たやうに身を投げかけもしなかつたし、泣いたりわめいたりもしなかつた。母はたゞ息子に接吻して、言葉なく座に着いた。震へる手で黒い絹の寛衣の皺を伸ばすやうな事までした。

セルゲイは知らなかつたが、父は此の面會のオサラヒをするのに前夜を徹したのだ。「俺達はどうしても伴の最後を潔よくさせて、彼奴を苦しめないやうにさせてやらにやならんのぢや」かう定めて、さて念に念を入れて明朝の面會の場合の言葉や身振を一々に吟味し

た。それでも時々は、其のオサライの途中で何が何やら分らなくなり用意した言葉をも忘れてしまひ、ひどく泣いて、寢椅子の隅へ身を投げ伏したのも幾度であつたか知れぬ。翌朝になつて漸く彼は夫人に面會の折の振舞について説明して聞かせたのだ。

「兎に角、彼と接吻したゞけで黙つて居るが好い」かう幾度も繰返して云つた。「なに、少し居ればお前も口が利けるやうになるさ、だが接吻の後には黙れよ。接吻して直ぐに口を利くやうな事をしてはいかんよ。解つたかな。でないとお前はとも云つてはならぬ事を云ふだらうからな」

「分りましたわ。貴方」と涙ながらに夫人は答へた。

「それから泣いちやいかんよ。誓つて泣いちやいかんよ。泣くな。泣くのは彼を殺すやうなもんぢやからな」

「でも貴方が現に御自分に泣いて居らつしやるぢやありませんか」

「お前だから安心して泣いてるのぢや。それがどうしていけない。それはさうと、お前は泣いちやいかんよ。好いかな」

「よろしうございますわ」

二人は一頭曳の馬車に乗つて出掛けた。黙つて打俯いた老の姿！二人は町の樂しげなどよめきの間をひたすら思に沈んで通つた。折しも戒食祭の季節で、どの町もどの町もにぎやかな人だかりがして居た。

二人は坐つた。大佐は自分に都合の好い態度を取つて、フロックコートの胸に兩腕を組んで居た。セルゲイはやゝ暫らく坐つて居たが、母親の皺のよつた顔に目が留まると、彼はふいと立ち上つた。「お掛けよ、セルゲイ」と母は頼むやうに云つた。

「まア坐れ」と父も同じ事を云つた。

三人は無言をつけた。母は先づ妙な笑顔をして

「お前の事でどんなに〜妾達が心をいためたか知れないのだよ。ねえセルゲイ、お父さんも……」

「無駄な事だつたがなア」

大佐は斷乎として云つた。

「兩親に捨てられたと云ふやうな事を汝に思はせまいために、私等はどうしても捨て、置く譯には行かなかつたのぢや」

又しても無言に陥つた。何だか云ふ言葉も云ふ言葉も、皆その本來の意味を失つて今はたゞ死と云ふ一事を意味するやうな氣がして彼等は一語を發するをさへ怖れた。セルゲイは香水の香のする汚れ氣の少ないフロツクコートを見て思つた。「お父さんには今は從卒はない。すると自分で自分の着物を拂はにやならない譯だ。俺はまだお父さんの着物を拂ふのを見た事がないが、一體そりやどうなんだらう。多分朝やるんだらうか。」かう思つて、突然彼は訊ねた。「所で妹は？ 達者で居ますか」

「ニノちゃんは何にも知らないんだよ」と慌て、母が答へた。

併し大佐は屹とそれを遮つて

「何で嘘を聞かせる必要がある。彼女は新聞を読んだのぢや……あれをセルゲイに聞かすが好い……何もかも……此子の……思つた……

……それから……」

言葉をついける事が出来ないで、彼はやめてしまつた。と見ると母の顔はしかんで、様子が取亂れてあらくしくなつた。光澤のない眼は物狂ほしく見ひらかれ、息は次第に喘いで來た。

「セ……セル……セル……セル……セル……」と幾度となく云つて、唇も動かさずに「セル……」

「こおれ！」

大佐は一足踏み出して、全身をぶる／＼震はせながら、自分の顔色が恐ろしい、死人のやうな蒼い色になつて居る事に氣も付かないでヤケ氣味なわざとらしい落ちつき方をして、夫人に云つた。

「黙んなさい。此子を苦しめちやいかん。此子を苦しめちやいかん。此子を苦しめちやいかん。此子は死な、けりやならんのだ。此子を苦しめちやいかん」

驚いて、夫人はとうに黙つてしまつたのに、大佐は胸に當てた手を震はしながら、同じ事を繰り返した。

「此子を苦しめちやいかん」

やがて彼は一足後へ下つて、又してもフロツクコートの前に手を組み、強ひて平氣な色を装つて、白くなつた唇を動かして、聲高く云つた。

「何時ぢや」

「明朝です」とセルゲイは答へた。

母は何事も聞かぬ風に唇を噛み締めながら地面を見つめた。そして次のやうな簡単な言葉を發しつゝも、なほ唇を噛みつけて居るらしかつた。

「ニノちゃんはお前に接吻してやつてくれるやうに云つてよこしたんですよ」

「僕になり代つて彼女にしてやつてください」と罪人は云つた。
「好いとも。それからチーフエートフさんの所からも宜しくつてね……」

「誰の事でしたかね。あゝ、さうく……」

大佐はそれを遮つて

「さア、もう往なにやならん。お立ち、ね、仕方がない」

父と子とで氣を失つたやうになつて居る母を引き起して

「暇ををしなさい」と大佐は命するやうに云つた。「祈つておやんなさい」

母は云はれたまゝに振舞つた。が、息子に一寸接吻して體へ十字

を切つてやりながらも、首を振つて、物狂ほしく

「いえ、さうぢやない。いえ、さうぢやない」と同じ事を幾度も云つた。

「セルゲイ、さよなら」と父は云つて、握手を交し、短かい間ではあるが、力の籠つた接吻を交した。

「貴方は……」とセルゲイは口を切つた。

「何ちや」と父は癡癡的に訊ねた。

「いえ、さうぢやない。いえ、いえ。どう云つたら好いでせう」と母は首を振りながら、矢張同じ事を繰り返した。と又腰を下ろした。たゞ最うよろしくして居る。

「貴方は……」とセルゲイは再び云つた。と、見る間に顔は悲しうな色を帯びて来て、眼に涙を一杯ためて、まるで子供のやうな泣顔をした。輝いた涙の玉の間から、彼は傍に居る父の蒼白い顔を見た、父も同じく泣いて居る。

「お父さん、貴方は實にしつかりした方ですねえ」

「何だつて？ 何だつてな！」と大佐はどぎまぎして云つた。と、もう全く耐え切れなくなつたやうに、彼は倒れかゝつて、息子の肩に顔押し當てた。そして二人は互に燃えるやうな接吻を交した。父は薄い髪の毛にそれを受け、囚人は上衣の上にそれを感じた。

「妾は？」と突然噎れた聲が訊ねた。

二人はその方を見た。母は再び跪づいて、首を振り仰のき、腹立しさうに、どちらかと云ふと悪々しげに二人を見つめて居るのだ。

「おい、どうかしたのかい」と大佐は叫んだ。

「妾は？」と狂はしげに首を振つて、母は同じ事を云つた。「貴方がたばかり抱き合せて、妾はどうしますの。貴方は男ぢやありませんか。それに妾は？ 妾は？」

「お母さん！」と叫んでセルゲイは母の腕に身を投じた。

大佐の最後の言葉はかうであつた。

「セルゲイ、迷はずに死んでくれ。勇ましく死んで呉れよ。軍人らしくな。」

かくて二人は去つた……監房へ歸ると、セルゲイは寢床の上へ倒れ、兵士に見えないやうに壁の方へ顔を向けて、永い間泣いた。

ワシリイ・カシーリンの母は一人で遇ひに来た。金持の商人であつた父は、一緒に来る事を拒んだ。老母が入つて来た時は、ワシリイは監房の中を歩いて居た。さう寒いと云ふ程でもないのに、彼は寒がつて震へて居た。短くて苦しい話を取り交された。

「來なくても好かつたのに、お母さん。何もお互に苦しめ合ふには當らないぢやないか」

「一體まア、どうしたと云ふの、ワシヤ？ 何故お前はこんな事を

したの、あゝ、あゝ」

黒い絹のハンカチーフで涙を拭き、老母は泣き出した。

一體、彼の兄弟共は母が單純な女で彼等を理解しない所から、無暗と母に荒く當りつけて居た。彼は今立ち止つて、ガタ／＼震へながら母に向て荒々しく云つた。

「そりやさうさ。僕にやよく解つてるんだが、貴女にや何にも解らないんだ。ねえ、お母さん、何にも解らないんさ」

「成程、ねえ。だがお前どうしたの？ 寒いのかい。」

「寒い」とワシリイは答へて、相變らず不機嫌な風で、時々老母を尻目にかけてながら、彼は又しても歩き出した。

「寒いのかねえ」

「あゝ、あゝ、貴女は寒いかくつてお云ひですが、なアに直に……」かう云つて彼は最うどうともなれと云ふやうな身振をした。母は又シクシク泣き出した。

「妾ねえ、お父さんにも「遇ひに行つてやつてください、貴女の子やありませんか、貴方の身ぢやありませんか、暇乞をさせてやつてください」つて云つただけけれど、どうしても來るとはお云ひでなかつたのだよ」

「罰當りめ。あんな者は親父ぢやない。ずつと悪漢で通して來たが今でも矢張さうだ」

「でも、ワシヤ、お前のお父さんぢやないか……」

かう云つて老母は責めるやうに首を振つた、可笑しくもあるが、怖ろしい。死と面前しながら、こんなさもない、無用な話を仕合はねばならぬとは何たる事だ。殆んど泣き出しさうになる程、自分の身の上が悲しくなつて、ワシリーは叫んだ。

「お母さん、解りましたか。僕は絞め殺されるんですよ。絞殺されるんですよ。解りましたか。え、どうです」

「でも何故お前人なんか殺したの？」と母は叫んだ。

「あゝ。何を云ふんです。獸だつて情はあります。僕は貴女の子やありませんか」

彼は坐つて泣いた。母も亦泣いたが近づきつゝある死の恐怖に面前する爲めの同じ情を取り交す事が出来ない爲めに、二人はいくら泣いても冷めたい涙は互の胸を暖めはしなかつた。

「妾がお前のお母さんかどうかと聞くのかえ。お前はこれまでどれだけ妾を馬鹿にして来たか知れやしない。それでも、御覽、この通りお蔭で此の二三日のうちに髪の毛がすつかり白くなつたのだよ」
「わかりました、わかりました。僕が悪いのです。左様なら。どうぞ僕になり代つて兄さん達によろしく云つて下さい」

「妾はお前の母ぢやないのかえ。お前の爲めに苦しまないとお云ひかえ」

つひに彼女は去つた。道が見えぬ程泣いて居た。そして監獄から遠ざかれば遠ざかる程、ますます涙の嵩が増した。彼女は歩みを返して、町の中へ姿を消した。自分が生れて、成長して、そして年取つた其の町の中へ姿を消した。彼女はとある小さな廢園へ這入つて濕つたペンチに腰を下した。

と、急に思ひ當つた。明朝自分の息子が殺されるのだ。跳ね上つてわめきながら駆け出さうとした。が、俄に眩暈がして倒れた。霜の白く置いた徑は、濡れてぬる／＼して居た。老婦人は再び起つ事が出来なかつた。黒い頸布は首から滑り落ちて、汚れた灰色の髪の毛をむき出しにした。と、何だか息子の婚禮を祝つて居るやうな氣が

して来た。さうだ、今し方式が濟んだ。妾は一寸飲んだ葡萄酒にす
つかり酔拂つてしまつたのだ。何だか氣が少し變になつて来た。

「どうしたら好いだらう。まア神様どうしたら好いでせう。」

で、ふら／＼する頭を抑へて、「飲み過ぎたく」と獨りごとつて、
濡れた土の上を匍ひずり廻つて……それでもなほ皆は彼女に酒を勸
めた。又しても酒。又しても酒。と腹の底から酔漢の笑が込み上げ
て来た。何だか最うステ、コ踊でもやり出したくなつた……それで
もなほ皆が唇に盃を當てがつて離さない。又しても一杯。又して
も一杯。

時の進み

罪を宣せられた五人のテロリストの幽囚されて居た獄屋には、古
い時計のついた塔があつた。一時間毎、三十分毎に、此の時計は、
渡り鳥の遠いいたましい叫び聲のやうに、限りない悲哀の響を傳へ
て鳴り渡つた。日中は此の奇體な、さびしい音樂も街の騒々しさに
打ち消され、監獄の前の廣い、景氣の好い往來の騒々しさに打ち消
された。馬車鐵道の軋る音、馬蹄のガタ／＼云ふ音、遠くから噎枯
れたラツパの音を響かせてやつて来る震へた自動車の響。折からカ

一ニバル祭が近づいて居るので、近郊の小百姓共は馭者になつて金儲をしやうと町へ集つて来た。小さいロシヤ馬の鈴がやかましく鳴り渡る。話聲は皆樂しきさうで、をるやうな気分が漲つて、いかにも遊び時の話しのやうであつた。天氣模様もそれにふさはしく、春の暖かさは氷を解かし霜を解かして道の泥は汚なくこね返されて居た。ほの暖かい風は海の方から、しつとりと濕つた息を吹いた。軽い、生々した空氣が、無限の彼方へと嬉しさうに翔り行くやうにも思はれた。

夜になると、大きな電氣燈の輝の下に、街はひっそりと静まり返つた。平らな土塀に圍まれた宏大な獄舎は、闇と静寂の底に落ちて

静さと影との柵門が、絶ゆる事なき活動の街と此處とを全く引き離してしまふ。と、かの時計の打つ音、間のびのした、悲しげな、全く此の世とかけ離れた世界の階調の生死するのが聞えて来る。眼に見えぬ砂時計の大きな滴りのやうに、時と分とが静かに振り動いて居る金屬製の盤の中へ、限り知れぬ高さから一つ又た一つ落ちて来る。時としてその音は、空渡り行く鳥のやうにも聞かれた。

監房へ来る物の音と云つては、夜となく晝となく、此の音の外にはなかつた。屋根を通し、厚い石の壁を徹して、沁み込んで来た。静寂を破るものは此の音の外になかつた。時には囚徒はそれを忘れたり、聞き落したりする事があつた。時には又ヤケ氣味に其の音の

→ 静寂の音
→ 監房へ来る物の音
→ 静寂を破るものは此の音の外になかつた

待たれる事もあつた。静寂の信じ難きを覺えた彼等は、たゞ偏にその音によつて生き、その音の爲めに生きた。此の獄舎は札附の罪人の爲めに保存せられて居たので、その特別に嚴格な規律は、其の扉の角の如くに堅く且鋭かつた。假に残酷の中にも尊い所がありとすれば、かすかな息、軽い擦音までも壓へつけてしまふ其の嚴肅な音なき死んだやうな沈黙も亦實に尊く美しいものであつた。

過ぎ行く分時のさびしい時計の音に裂かれる此の沈黙の中に、三人の男、二人の女は、全く人間の世から離れて、夜の來るを待ち夜明の來るを待ち更に死刑の執行の來るを待つた。そしてそれ／＼思ひ／＼にその準備をして居た。

生涯を通じてターニヤ・コワールチユクはたゞ偏に他人の事ばかり心を使つて來た。今に至つて彼女の心を勞して居る事も、矢張り苦しみ惱む仲間の身の上ばかりであつた。セルゲイ・ゴローフィンやムスヤヤ、その他の者共を脅かして居るが故にのみ、彼女は死と云ふ事を心に描いて見た。而も自分も亦殺されるのだと云ふ事は、少しも考へなかつた。

裁判官の前で見せたわざとらしい落ち着きの報いでゞもあるやうに、彼女は監房へ來てから幾時間も泣き通した。かう云ふ事はひどい苦しみを受けた婆さんに好くある習ひだ。さてかの煙草好きのセルゲイに煙草が吐めず、茶好きのウエルネルに茶が飲めない、殊にそ

れが死に際の有様だと云ふ事に思ひ至ると、彼女は最う死刑の執行程にそれを氣に病んだ。刑の執行は少なくとも避け難い、どちらかと云へば不意の出来事で、別に考へるにも當らない事としても、死刑を執行される其晩だと云ふのに、囚徒に煙草も喫ませられぬと云ふ事が、何としても堪へ難い思の種であつた。日常生活のさまざまに楽しい追憶を思ひ起し乍ら、彼女はセルゲイ親子の現在の面會を悲しみ嘆いた。

ムスヤについては、又格別のいとしさを覺えた。久しい間、思ひ違ひではあつたが、ムスヤがウエルネルに戀して居るやうに思つて居た。そして二人の未來を思つて、美しい花やかな空想をして居た。

拘引される前にムスヤは荆棘の冠で取り巻いた鬮と骸骨を彫つた銀の指輪をはめて居た。時々ターニヤ・コワールチユクは此の指輪を悲しげに眺めて、何だかそれがあきらめの印で、もあるやうな氣がして、眞面目半分おどけ半分に、それを取り去るやうにムスヤに勧めた事があつた。

「いやですよ。貴女になんかやれないんだわ。貴方だつて直に他の好いのが見つかるでせうよ」

他の仲間も同じくターニヤが直に結婚する事と思つて居た。當人はひどくそれを厭がつた。亭主をほしいなどは少しも望んで居なかつたのだ。だがムスヤとの話を思ひ出し、ムスヤが眞實思ひ切つ

たのだと思ふと、ターニヤには娘の身をいとしむやうな心がして、涙が留度なく流れた。時計が鳴る度に、彼女は涙にぬれた顔を上げて、ちつと聴き耳を立てた。此の悲しげな死の知らせを、他の監房の人達はどんな心持で聴いてるだらう、それが彼女には心を曇らせる種であつた。

死はない

だがムスヤは心楽しくして居た。

両手を脊中で組み、借衣した若者のやうに大き過ぎて體に合はな

い獄衣を着て、同じ足取で少しも捲み疲れるやうな色もなく、彼女は部屋の中を彼方此方と歩き廻つた。獄衣の長い袖をまくり上げた瘦せた、細い、子供のやうな腕を、粗製な汚れた、花瓶から抜け出た花の腕のやうな恰好に、ひらくする袖の蔭からむき出して居た。衣物の地が粗いので、彼女の白い、ほつそりした首筋の皮が刺すやうな氣がした。時々両手で喉の所をゆるめて、おづく燃えるやうになつた皮膚の一所に觸つて見た。

ムスヤは大股に歩いた。そしてきまり悪さうに、殉教者の爲めに今なほ世の中に残された美しい死の中の、最も美しい死を割り當てられたのは自分だと云ふ事實を、われと我身に是認して見た。こん

なに若く、こんなに卑しく、而かもこのやうに大した事もしなかつた自分に。さう思ふと、何だか自分は絞首臺の上で死ぬのに、自分ながら厭な偽りの見えをして居たやうにも思はれた。

辯護士との最後の會見の場合に、自分を助けると思つて毒を呉れろと頼んだが、直にそんな考は捨て、しまつた。恐怖と虚飾とで動いて居るのだと人は思ひはすまいか。おとなしく、人知れず死な、いで、わざ／＼馬鹿な騒を起したがるのではないか。こんなことまで思つて見たが、すぐにその後から口早に獨語つた。

「いえ、いえ、何の役にも立たんことだ」

今の場合彼女のたゞ一つの願は、自分の勇女などでない事、死ぬ

と云ふやうな事の大した事でない事、随つて自分は決して人様から氣の毒がられたり、心配されたりするに當らぬ者である事を、どうかしても明らかにして置きたい事なのだ。

ムスヤは自分の犠牲的行爲を賞めて、それに眞の評価を與へるやうな口實や言草を實際眼の前に異議を唱へる人でも居るやうな心持で求め探した。

「此の通り」と獨りごつて「妾は若いのだ。妾はまだ此の先どんなにでも永く生きられる。それにも拘らず……」

だが丁度蠟燭の光が昇る朝日の輝きで消されるやうに、青春と云ふやうな事も命と云ふやうなもの、しとやかな自分の身を飾らう

として居る莫大な、花々しい賞讃に比べて見ると、何だかつまらな
い、ものういものゝやうにも思はれる。

「それで好いのだらうか」何が何やら分らなくなつてムスヤは、か
う獨語つた。「それで好いのだらうか。人から泣いて貰ふだけの價値
が妾にあるのだらうか。」

さう思ふと何だかいふに云はれぬ嬉しさが込み上げて来る。最う
何も疑ふ事はない何もかも運命がきまつたのだ。方々の國々から、
あの火焰の中をくぐり、死刑の難關を犯して天國へ赴く幾多の勇士
その中の一人に自分を數へるだけの權利は、妾にもあるのだ。何と
云ふ安らかな平和だらう。何と云ふ限りない幸福だらう。肉體を離

れた、日に見えぬ物となつて、聖なる光の中に漂ふ、彼女はそれを
自ら信せざるを得なかつた。

更にムスヤはどんな事を考へたか。命の絲が彼女に取つては禍を
受けずして靜かに規則正しくほぐれて續くやうになつて以來、彼女
はさまざまの事を考へた。近づきつゝある自分の所刑を苦しい思ひ
充ちて眺めて居る遠くの仲間を思つた。自分と一緒に絞首臺へ上る
同じ獄舎に居る仲間の事を思つた。いつもあんなに勇ましかつたワ
シリーが、何故あんなに怖がるのだらうと怪しんでも見た。火曜日
の朝、一方では殺す用意をし一方では死ぬ用意をすべき火曜日の朝
となつて、ターニヤ・コワールチユクは感極まつて顫へ上つた。皆は

やむを得ず彼女だけをのけものにした。所がワシリーと來ると何のおかまひもなくふざけたり、笑つたりして、騒ぎの中を跳ね廻るの
で、ウエルネルも、キツとなつて云つた。

「死を弄んぢやいかんよ」

それにしても何故ワシリーは今になつて恐れたのだらう。だが此のはかり知るべからざる恐怖も、ムスヤの心にはまるで他事のやうであつた。彼女はもうそれについて考へたり、その因て來る所を怪しんだりする事はやめてしまつた。何だか急にセルグイ・ゴローフィ
ンに遇ひたくなつた。遇つて一緒に笑ひこけて見たくなつた。

恐らく彼の思も亦、かの限りない地平線の前に、自分に快い凡て

の空間と、やさしい、穏やかな碧空の中を飛び廻る身軽な鳥のやう
に、同じ一つの事を永く考へるのを好まなかつたのであらう。時計
は鳴りつゝけた。思ひのかすくは悉くその調子の合つた、微かな
階音の中に溶け去り、飛び交ふ心象の數々は一種の音楽を奏した。
何だか静かな夜に、廣い安らかな道を歩いて居るやうな氣がして來
た。馬車は安らかに走つて行く。ありとあらゆる心掛りが消え去つ
て、疲れた體が闇の中に溶けた。嬉しいやうなものういやうな、さ
まぐの活々とした心象が事もなく浮んで、美しくもつれ合つた。ム
スヤは近く絞殺された三人の仲間を懐ひ起した。三つの顔はあり々
々と、手に取るやうに近く見えた。活きて居た時よりも一層身に近

いやうに見えた……まるで晩になれば唇邊に微笑を浮べて迎へてくれる親切な友人の事を、其の日の朝に楽しく思つて居る、そのやうなものだ。

とうとうムスヤは歩き疲れた。で、寢床の上に静かに身を横へて半ば閉ぢた眼に、相變らず夢を見つゝけた。

「これが眞實に死ぬと云ふ事なのだらうか。まア、何て美しんだらう。それともこれが生きると云ふ事なのではないか知ら。わからない、わからない。今見に行くのだ今聞きに行くのだわ……」

獄につながれた其の日から、彼女はさまざまな幻想に囚はれて居た。元來音樂の耳があつた上に、静寂の爲めに鋭くなつた聴覺は此

世の如何に小さい響でも聞き逃がさなかつた。廊下を歩く番卒の足音、時計のうつ音、亞鉛屋根を渡る風の囁き、塔燈の軋り、それ等さま／＼の物の音は彼女の耳には大きな一つの神祕に充ちた音樂に溶けて聞えた。初めは幻想の發作に驚いてムスヤは病的な現象としてそれを退けて來たが、次第に自分の身の健康を認め精神病的な兆候のないのを認めるやうになり、幻想をすらも退けなくなつた。

だが今ふいと軍樂隊の響がひどく判然と聞えたので、彼女は驚いて、首を上げた。窓を透かして見えるものは、たゞ夜。時計が打つた。「あれ、又！」と思つて閉ぢるともなく眼を閉ぢた。又しても音樂が始まつた。ムスヤは、はつきりと監獄の角を曲つた兵隊の足音を

聞いた。あれ、一聯隊の兵士が窓の外を通る。音楽に合はした靴の音が凍てた地の上に響く。一！ 二！ 一！ 二！ 時々中の一人の靴がギュー〜鳴る。誰か滑つたと思つたが、直にもと通りになつた。音楽がだん〜近づいて来る。ムスヤの知らない騒々しい凱旋の曲だ。きつと何か此の城の中で祝典があるのだ。

兵隊が窓下へ来たかと思ふと、急に部屋の中は楽しげに、紀律正しい、調子の合つた音で一杯になつた。大きな真鍮のラツパの調子外れの音を出した。拍子が合つて居ないぢやないか。ホラ早速ぎるホラ今度は妙にグズ〜して居る。ムスヤは一生懸命にラツパを吹いて居る小さな一人の兵士の姿を心に描いて見て、笑つた。隊列が

通り過ぎた。足音がだん〜微かになる一！ 二！ 一！ 二！ 遠くなればなる程音楽がだん〜賑かに、だん〜美しくなつて聞える。何でも五六度、前と同じラツパが拍子を間違へた。あの金扇から出る、甲高な面白い音！ とやがて何もかも静まり返つて、又しても塔の時計が時を報じた。

何だか新らしい何物か、彼女におつかぶさつて来て、眼に見えぬ雲のやうなもので自分を包んで、何處か素的に高い所へ引き上げて行く。鷹か鷺のやうな猛しい鳥が飛んで居る。右にも左にも、上にも下にも、到る所に何かの傳令のやうに鳥が鳴いて居る。呼ぶ。警める。風を切つて行く鳥の張つた胸に、キラ〜する空の色が映る。

ムスヤの胸はだん／＼動悸が治まり、呼吸がだん／＼平らに静かになつて来る。彼女は眠つた。顔は蒼く、體はだらけて、眼の縁に黒い輪が出来た。口元に微笑が浮んで居る。だが、明朝日の出と共に此のさかしげな美しい顔は、人間らしい所のないしかみ面に變るのだらう。脳には濃い血が滲むのだらう。ガラスのやうな眼が眼窠から飛び出すのだらう。だが、今日はそのムスヤも穏やかに眠つて居る。自分の不死の境涯に微笑んで居る。

ムスヤは眠つて居る。

而も獄舎はその一種特別な、盲目的な、眠らない生活をつづけて居る。その一種永遠的な心遣ひを續けて居る。人々は歩く。人々は

囁く。鐵砲は音を立てる。誰か怒鳴り出したやうな氣もする。此れ果して現實か、將た幻想か。

戸の格子が音もなく下りた。その眞闇な中から毒々しい髯面がのぞいた。やゝ暫らく廣く見開いた眼に、驚きの色を浮べてムスヤの寢姿を眺めて居たと思ふと、その顔は來た時と同じく静かに消えた。

塔の鐘がはてしなく鳴り響いた。云はゞものうい時間が高い山を上つて、歩一歩眞夜中の巔へ近づいて行くやうなものだ。上りが歩一歩苦しくなる。辻つたかと思ふと、呻き聲を出して倒れる。と又起き上つてかの眞黒な頂上へと苦しげに上つて行く足音がした。囁きが聞えた。と最う人々はかの陰氣な、色も艶もない馬車に、馬を

よそはつて居る。

死あり又生あり

セルゲイ・ゴローフインは死と云ふ事については考へた事がなかつた。何だか不意の出来事のやうなもので、自分とは縁のないものゝやうに思つて居た。彼は嚴丈につくられて居た。いかなる不吉な考へと雖、いかなる生命に危険な考と雖、體の機關に何等の害を興へずして速に追ひ拂ふに十分な生の歡びを受け入れるだけの爽快な心を賦與されて居た。彼にとつては肉體の傷さへ早く癒れば、心の

傷害もそれと一緒に癒るやうに出来て居た。彼は自分の快樂であらうが犯罪の準備であらうが區別なく如何なる行爲に對しても同じ嬉しい曇りのない心で進んだ。此の世の物は凡て楽しく、凡て努力してやるべき値打があるやうに思つて居た。

で、何事にかけても彼は一通りうまくやつた。ボートを漕ぐのも人一倍うまかつたし、射的も非常にうまかつた。友誼の上でもまるで戀でもして居るやうに親切であつたし言葉の名譽はどこくまでも重んじた。人あつて若しそれが問者であると解つても、當人さへ問者でないと思へば、セルゲイはきつとそれを信じて握手してしまふだらう、かう云つて仲間の者が大笑した事がある程であつた。だが

唯一の過は、彼が自分を歌の上手と思つて居る事だ。その辯革命の讚美歌を歌ふ時でさへ、既に甚だしい間違をやるのであつた。そして人がそれを笑ふと彼はひどく怒つて、

「そりや君達が皆馬鹿なんだ、さうでないとするりや僕が馬鹿なんだ」とムキになつて喰つてかゝつた。と仲間の者は一寸考へる振をして、真面目らしい調子で云ふのだ。

「馬鹿なのは君さ。その聲でわかるぢやないか」
所がそれが地位のある人達となると、ひどく彼は可愛がられた。と云ふのも大方彼の徳性よりは、その並外れた所が氣に入つたからだらう。

彼は左程死ぬ事を念頭にも置かず、又左程怖がりもしなかつた。かの危急存亡の朝ターニヤ・コワールチユクの住居を出る前の如きもいつもと同じく食慾に驅られて朝飯を喫べたのは、彼一人であつた。茶を二杯飲み、二錢のパン片をまるで一つ食べた。その揚句にウエルネルのパンに手をつけないで居るのを見て、こんな事まで云つた。

「何故たべないの。喫べたまへな。力をつけて置かにやならんよ」
「腹が減らないからさ」
「ぢや、僕が食はう。好いかね」
「えらく食べるもんだね」

返事へんじのつもりでセルゲイは口一杯くちはいパンを頬張ほばりながら、調子外てうしはづれのガラこま／＼聲こゑで歌うたひ出した。

「いやな風かぜめが頭あたまの上うへを吹き廻まはる」

逮捕たいほされた後あとで、セルゲイは暫しばらくくは悲かなしかつた。計畫けいかくが悪わるかつたとも思おもつて見たみたが「なにかうなつてもまだ一つうまくやらにやらん事ことがあるんだ、死ぬにもうまく死しにたいもんだ」と獨ひとりごつた。と又またもちまへの晴はれ々々しい心持こころもちに歸かへつた。獄屋ごくやへ入いれられた二日かめ目めから彼は體操たいさうをやり出した。前まへからひどく氣きに入いつて居かたミュルレルと云いふドイツ人じんの至極しごく理論りろん的な方式ほうしきに従したがつた體操たいさうだ。素裸すつたかになつて、番人ばんにんの驚おどろいて居ゐるのも何もかまはず、十八の定式ていしきを念ねんに念ねんを入れて

やつた。

ミュルレル式體操しきたいさうの宣傳者せんでんしやとして、その運動うんどうの方式ほうしきに従したがつて居ゐる兵士へいしを見るのが、彼かれには非常ひじょうな満足まんぞくであつた。で何なんの返答へんたふも得えられぬ事ことを承知しょうちして居ゐながらも彼かれは格子かうしをのぞいて居かる眼めに向むかつて、かう云いつた。

「このやり方は非常ひじょうな利益りえきがあるよ。力ちからをつけるにや持つて來こいと云いふやり方かただ。隊たいでも是非せひやらにやらん事ことなんだせ」

かう云いつて置いて、更さらにやさしい、説とき勸すすめるやうな聲こゑで、何なんも自分じぶんは君きみをおどかす爲ためめにこんな事ことをするのではない事こと、それから看守かんしゆが自分じぶんを氣狂きかひだと思おもつて居ゐるに違ちがひないと云いふ事ことなどを云いひ添そ

へた。

死の恐怖は壓するやうに彼を襲ひ、激しく彼を突き動かした。彼は胸の所を下から激しく突き上げられたやうな気がした。やがてその感激は跡なく消えたが、二三時間づつしては戻つて來た。そして度重なる毎にそれがだんく烈しくなり、そのつゞく間が永くなつた。終にはそれが堪へがたき苦惱の、漠然たる輪廓をさへ形造り初めた。

「怖がるなんて事があるものか」と我ながら呆れた。「馬鹿なッ！」だが怖がるのは彼ではなくして、ミュルレル式の體操を以てしても冷水浴を以てしても欺く事の出來ない處の若い嚴丈な、力の充ち

た彼の肉體であつた。冷水浴をして體が強くなり氣持が晴々すればする程彼の恐怖の情がますます鋭くますます堪へがたくなつた。朝熟睡と體操の後で何か自分とはかけ離れたもの、やうにして此の殘忍な恐怖が現れて來た——彼が以前に殊更自分の力を自覺し、生の歡びを覺えたのは、正しく其の瞬間であつた。之れに心づいて彼は獨ごつた。

「馬鹿！ 此の肉體を手易く死なす爲めにだんく弱らして行くべきでこそあれ、それを堅固にすると云ふ事があるか」

かう思ひついてから彼は體操もマツサージも止めてしまつた。此の事を説明する爲めに彼は兵士を呼びかけた。

「ねえ君、あの體操の式は好いんだがね。絞殺されやうと云ふ者にだけは、何にもならないんだよ」

氣が輕くなつたやうに覺えた。體を弱らせる爲めにだんく、食量を減じて見やうとも思つたが、空氣と運動の缺乏にも拘らず、食慾は依然として盛んであつた。セルゲイも之れを拒む事が出来ずして持つて來るものを何もかも食ひ盡した。で仕方なく一種の方法を考へて、食卓に向ふ前に自分にあてがはれた汁を桶の中へあけてしまふ事にした。所が此のやり方で効を奏して、非常な倦怠とぼんやりした無感覺の状態が彼を襲つて來た。

だが直に體は此の「制裁」に慣れて、死の恐怖は又しても出て來た。尤も以前のやうに左程苛酷な形は取つて現はれるのでなくて、舟にでも酔つた時のやうにぼんやりした氣持悪さではあつたが、それにも拘らずだんく耐へるのがつらくなつた。

「此奴アあんまり續く時間が永いからだ」とセルゲイは思つて「一層刑に遇ふまで眠りつゞけられると好いんだが」と云ふので、出来るだけ眠つて見やうとした。始めの間は其骨折もあながち無駄ではなかつたが、やがて不眠症の状態が、群り攻める雜念と、更に此世と別れなければならぬと云ふ嘆きとを伴うて起つて來た。「ちや俺はいよく、以て怖いんだな」と死と云ふ事について考へながら自ら問うて見た。「いや俺の悲しむのは此の命を失くする事なんだ。よく厭

世家の連中が首でもくゝつて死にたいなどと云ふが、何たる事だ。あゝ。俺は此の世に別れるのが悲しい。非常に悲しい。

いよくもう萬事休したと知り、自分の前にはたゞ空しい數時間待つて居るのみだ、そして其後は死あるのみだと知るに及んで、彼は一種妙な感に打たれた。何だか妙な恰好に自分を裸にひんむかれたやうな氣がした。着物を抜き取つたばかりでなく、太陽も、空氣も、音も、光も、話も、動く力も、何もかも残らず剥ぎ取られたやうだ。死はまだ來ないが、生は既に空しい。何とも考へて見やうのないやうな、何とも知りやうのないやうな、それで居て至つて幻妙な、神祕な、一種の得體の知れぬ感じを彼は覺えた。

「ちやこりや一體何だ」と苦しみの中からも疑つて見た。「一體俺は、俺は何處に居るのだ。俺は——俺は一體何者だ」

自分で自分の體を綿密に興味を覺えて檢べて見た。初めは囚徒の履くやうなゆるい上靴からだんぐと檢べて行つて、終にはだぶだぶの上衣で包んだ腹までも及んだ。兩手を擴げて部屋の中を行きつ戻りつし出した。そして長過ぎる衣物を着て見る時に女のするやうな風に自分で自分の様子を眺めつけた。首を廻して見やうとする。首は廻つた。自分は正しく自分、ちきに此世に居無くなるセルゲイ・ゴローフィンであると云ふ事が、一寸怖ろしい氣がした。何もかも妙になつて來た。

歩いて見た。歩くと言ふ事が變だ。坐つて見た。坐わると云ふ事が妙だ。水を飲んで見た。水を飲めると云ふのが奇體だ。飲み込むのが妙だ。ガブリとやるのが變だ。指——此の震へた指の見えるのが怪しい。咳が出かゝつた。「何て妙な事だ。俺が咳をする」かう思つた。

「一體どうしたんだらう。俺は氣が違ふんぢやないかな」と自ら問ふて見た。「だがこんなつまらない事をするのも最うおしまひなんだ。眞實さうだ」

彼は額を拭つた。額を拭ふと云ふ事も何だが矢張妙だ。今度は息もせずに、じつと不動の姿勢を取つて見た——何だか最うすつかり

自分の考事をなくし、息の根も絶ち身動もなくして居るやうな氣がした。さうだ、考と云ふ考は皆狂つて居るのだ。動作と云ふ動作は皆狂つて居るのだ、時間は消えて空間に變つた。無色透明な空間に變つた。そこには空氣なくたゞ広い場所があるのみだ。土地と生命と人間とのあらゆるものを容れた広い場所があるのみだ。そして人は何物に對しても、その極限までも見渡す事が出来る。そのえ知れざる際崖までも見渡す事が出来る。死の果までも見渡す事が出来る。セルゲイの怖れたのは死を見たからではない。死と生とを同時に見たからだ。汚れた手がカーテンを上げた。生の秘密と死の秘密とを凡ての永遠と名づけられたものから、隠してあつた、其のカーテン

を上げた。秘密は最早秘密でなくなつた。それ等は外國語で書かれた眞實と等しく、考へれば考へられるものとなつた。

「と、矢張り再びミュルレルへ戻つて来るわけだ」と彼は突然聲高く叫んだ。その聲には深い信念が籠つて居た。首を振つて、彼は嬉しさに又眞面目さうに笑ひ出した。

「あゝ。我が善良なるミュルレル氏よ。なつかしきミュルレル氏よ。尊敬すべきドイツ人よ。結局貴方が正しいのだ。僕に至つては實に、之れ一個の愚物に過ぎずだ」

彼はあわたくしく部屋を駆け廻つた。格子越に見張をして居た兵士の驚いた事にはセルゲイは素裸になつて、例の十八式體操を一生

懸命になつて正確にやりつゞけて居るのだ。心持瘦せたと思はれる若い體を彼は夢中で曲げたり伸ばしたりして居る。とやがてそれを止めて息を吸ひ込んだり吐き出したりした。足の爪先で立ち上つた。腕と脛を動かした。

「だが、ねえ、ミュルレルさん」かう念を押してセルゲイは胸を突き出した。薄い、張り切つた皮膚の下に肋骨の輪廓がハッキリ見えた。

「ねえ、ミュルレルさん、此の外に今一つ第十九式と云ふのがあるでせう。一定の位置に於て首を吊せ！と云ふそれですよ。首絞と稱するのがそれです。わかりましたか。例へば先つ一人の生きた人間

セルゲイ・ゴローフィンと云ふやうな奴を連れ出す。次に人形のやうにそれをひつくるむ。最後にくたばるまでその首を吊して置く。馬鹿らしいやうだが、それが方式だから仕方がない、従はにやならん」

かう云つて右の方へもたれ氣味にして、同じ事を繰り返した。「仕方がない。従はにやなりませんよ。ねえ」

恐ろしい寂寞

同じ屋根の下で、同じ無頓着な時計の歌を聞きながら、セルゲイ

からもムスヤからも二三室を隔つた所に、此の全世界に生きた者としては自分一人でもあるやうな孤獨の状態で哀れなワシリ・カシリンは苦悶と恐怖との中に一生を終りつゝあつた。

汗でびしょ濡れになり、衣物は體に粘りつき、以前には捲き縮れて居た髪も今は真直な束になつてだらりとしてしまつた。丁度齧歯に苦しむ人のやうに身を悶えながら、悲しげな足取で監房の中を行きつ戻りつした。一寸坐つて居たかと思ふと、直に又駆け出す。と、今度は壁に額を押し當てたりヂツと動かずに居たり、薬でも探すやうに四邊を見廻したりする。二つの違つた顔を持つて居たのではないかと疑はれる程に顔が變つた。何處へ行つたとも解らずに其の若々

しい一つの顔が無くなつて、それに代つて此の恐ろしい第二の顔が暗の中からでも来たやうに現れた。

恐怖は忽然と現れ來つて、我儘な壓制な主婦のやうに彼の全身を掌握してしまつた。死に、行くと定つた、かの兇行の朝でも、彼は平氣で戯れて居た。が、其晩此の監房に閉ぢ籠められてからと云ふものは物狂ほしい恐怖の波のまに／＼押し流され捲きくるまれてしまつた。彼が自ら進んで危険を冒し死にぶつからうとして居た間は、又どんなに恐ろしくても自分の手で自分の運命を握つて居た間は、兎に角心は落ち着いて居てどちらかと思へば樂しくさへあつた。身に覺えた恥かしい意氣地ない僅かの恐怖も、限らない自由の

意識の中へ消え去り、固い意志の大膽な斷定に打ち消されて何の跡をも留めなかつた。腰のあたりに爆發械を巻きつけて、身を以て人殺の器械ともなつた。其の殘忍な理性と發火と殺人の力とを、彼はダイナマイトから借り受けて居た。街を通り、用事を持つた人々が忙しさに馬車や鐵道馬車に身を打ち込んで居る人込みの中にあつて、彼は自分の身を死や恐怖など云ふものゝない全く別な、え知れぬ世界から來たものゝやうな氣がして居た。

所か思ひがけなく恐ろしい、混亂した變化が起つた。ワシリーはもはや自分の行かうと思ふ所へ行く身でなくなつて、他人がやらうと思ふ所へ引かれる身となつた。彼は最早處を選ぶ事も出來ない。

人々は彼をまるで一個の物と同じく石の牢へ入れて、鍵をかけてしまった。彼は最早生と死とを選ぶ事が出来なくなつた。人々が自分を死に引き入れる事は確かな動かし難いことだ。意志と、生命と、力との権化であつた彼は今は無力其者の哀れな見本となつた。全く屠所の羊に過ぎない。何を云つても聞かれない。叫ぼうとすると口へ襤褸を詰め込まれる。歩かうとすれば引つ捉へて絞め殺してしまふ。抵抗したり、争つたり、地面へ體を投げ出して見た所で、彼等の方が彼よりは強い。摘まみ上げ、くゞし上げて、絞首臺へ引きずつて行くに違ひない。自分と同じ人ではあるが、死刑を執行する人達の事を想像して見ると何だかあの無謀な自働機械の並外れた恐ろ

しい有様が新らしく見えて来る。彼等の所爲は此世の何物の力を以てしても止める事は出来ない。人を引捉へて、壓へつけて、首を絞つて、足を引きずつて繩を切つて、棺桶の中へ投げ込んで、運んで行つて、土の中へ埋めてしまふのだ。

入獄したその日から、人間も此世も凡て彼にとつては機械人形ばかりの云うに云はれぬ恐ろしい世界のやうに變つて來た。恐怖のあまり狂氣のやうになつて、其等の人人だとして舌もあり話も出来るのだと想像して見たが駄目であつた。口は開くが出て來るものはたゞ音のやうなものだけだ。と思ふと、其等は勝手に足を動かして皆別れ／＼になつてしまつて、それでもうおしまひだ。今の場合の彼は、

丁度夜中に一人で家に残つて居て家中の物と云ふ物が凡て生體を現はして動き出し、測り知れぬ力で壓して來ると思つて居るうちに、戸棚や椅子やソファや机が自分を裁判しやうと高く坐る、さう云ふ光景を見て居る人のやうだ。わめいたり、助を呼んだり、哀願したりして部屋から部屋へと駆け廻る。いろ／＼な物がそれ／＼獨得の言葉で饒舌り出す。最後に戸棚や椅子やソファや机が、彼を絞殺さうと立ち上る。他の物共はそれを見物する。

死刑を宣告されたワシリー・カシーリンの眼には、凡ての物が子供らしいものに見えた。監房も、格子戸も、時計の時を打つ装置も念を入れて模造した天井のある城塞も、それから就中かの小銃を装

置して、廊下を彼方此方と歩き廻る機械人形と、格子を覗き込んで無言のまゝ、食物を渡して自分を驚かす人形とが、最も子供らしく見えた。

人間らしいものは此世から消え失せた。

法廷で自分の仲間を見て初めてカシーリンは我に返つた。暫らくは人間共も目に入つた。あの通り、自分を裁判したり、人間の言葉を饒舌つたり、耳傾けたり、解つたやうな振をしたりして居た。だが母に遇つた時には、狂氣になりかゝつて自分でも其れを知つて居る人のやうな恐怖を覚えながら、矢張その黒い頭巾を巻いた婆さんを單純な機械人形だと明らかに感じた。どうしてこれまでそれが解

らなかつたんだらうと怪しんでも見た。そして何か知ら痛ましい中
にしつとりとした味のある、限らない悲しい事のやうに思つて、其
の母との會見を待つて居たのが、不思議なやうな氣もした。努めて
何か云はうとする間にも、身震ひしながら彼は思つた。

「あゝどうしやう！ だがありや人形だ。人形のお母さんだ。あす
こには又人形の兵隊さんが居る。家には人形のお父さんが居る。そ
れから此奴は人形のワシリー・カシーリンだ」

母が泣き出すと、ワシリーは再びどこか知ら人間らしい所を母の
中に見た。がそれが母が物を云ふと同時に、消え失せてしまつた。
好奇心と恐怖とを以て彼は人形の眼から涙の出るのを見つめた。

恐ろしくて堪らなくなると、ワシリー・カシーリンは祈をしやう
としたが心中にあるものはたゞ父の家、豪商の家で、自分の青年時
代を養つてくれた凡べての宗教の教理に對する苦しい、いやな、氣
を腐らすやうな怨みだけだ。彼れには信仰はない。だが極く小さい
時分深く心を動かした言葉を或日誰からか聞いたことがあつて、そ
れが今日に至るもなほ依然として一種のやさしい詩に包まれて心に
残つて居る。その言葉と云ふのはかうだ。

「惱める者の歡び！」

時々、苦しい折には、祈禱もしなければ、自分のして居る事につ
いて考へるでもなしにたゞ小聲で「惱める者の歡び！」と云つて見

る。と、すぐに救はれたやうな氣になつた。誰か自分に親しい人の傍へ行つて、おとなしくかう訴へて見たかつた。

「吾々の生活……だがこれが眞實に生活と云ふものなんだらうか。ねえ、君！ 眞實にこれが生活と云ふものなんだらうかと今度は急に自分で自分が馬鹿らしくなり、胸を擴げて誰かに打つて貰ひたいやうな氣になる。

彼は誰にも、彼の所謂「惱める者の歡び！」を話さなかつた。一番親しい仲間にも話さなかつた。自分にも知れない程それは心の奥深く秘されて居るやうな氣がした。そして稀にそれをそつと呼び出して見る位なものであつた。

今や彼の前に起りつゝあつた測り知るべからざる神祕な恐怖は、丁度満潮時に水が岸の草木を浸すやうに彼を蔽ひ去つたので、彼はどうかして祈りたいと願つた。跪いて見たかつた。併し番兵の手前恥かしかつたので、仕方なく胸の上に手を組み合せて、小聲でつぶやいた。

「惱める者の歡び！」

祈願をこめる調子で、おそる／＼繰り返した。

「惱める者の歡び！ 我れに下れ、我を助けよ」

何か軽く動いた。悲しみに充ちた、やさしい力が遠くに漂ひながら、苦しみの影を照らしもせずそのまま消えてしまつたやうな氣

がした。塔で時計が打つた。兵士は幾度となく大きな欠伸をした。

「惱める者の歡び！ 黙つて居るんだね。此のワシリー・カシリーンには何も言つてはくれないのだね」

彼はあまへるやうな笑顔をして待つた。が彼の心の中には身をめぐると同じ空虚があつた。無用な、苦しい雑念が彼を襲つた。と又例の蠟燭の火が見える。禮服を着た坊さんが見える。壁にかけた聖像が見える。屈んだり伸びたり、祈つたり、跪いたりして居る父の姿が見える。ワシリーも祈つて居るか、それともたゞ面白半分やつて居るかを見やうとでもするやうに父は熱心な眼を此方へ向けて居る。かくてカシリーンは以前よりも更に深い苦しみの裡に陥つた。

何もかも消えた。

彼の意識は爐へ投げ散らされた燃屑のやうに消え去つた。手足は既に冷たくなつて居るが胸だけにはまだ暖味の残つて居る死んだばかりの人の體のやうに、ワシリーの心は固く氷つてしまつた。

人々が彼を引き出しにやつて来た時は、ワシリーは非常な恐怖に襲はれた。彼は死刑執行の時が来たのかどうかと怪しむ隙さへなかつた。彼はまるで子供のやうに人々の姿を見たいだけで縮み上つた。

「決して二度とはしません！ 決して二度とはしません！」と人にも聞えない小聲でつぶやいた。そして唇を氷のやうに冷たくして、まるで子供の時に父の懲罰をのがれやうと逃げ廻つたやうに、部屋

の奥へジリ／＼後退りをした。

「お前は行かなくちやならんのぢや……」

人々は何か話をした。自分の周りを歩いた。何だか知らないが何か自分に呉れた。彼は目を閉じた。よろめいた。そして苦しいながらに仕度をしかけた。突然巻煙草を呉れいと役人の一人に頼むと、役人は快く箱を開いてくれた。

壊れた壁

ウエルネルと綽名された、本名の知れぬ男は戦に疲れた人であつ

た。彼は熱烈に生を愛し、劇場を愛し、社交を愛し、文學を愛して居た。元來優れた記憶力を持つて居たので五六ヶ國の言葉を完全に話した。彼は衣装に意を用ひ、風采もひどく好かつた。テロリストの全團體中で氣付かれると云ふ虞なしに、交際場裡に出る事の出来たのは、彼一人であつた。

既に久しい以前から、彼は仲間の眼も惹かずに人間に對する深い侮蔑の念を抱いて來た。詩人と云ふよりは寧ろ數學家朋であつた彼は、歡喜とか靈感とか云ふ事を縁遠いものに思つて來た。時には自分を省みて、かの人間の血の海の中を駆け廻らうとする狂人のやうにも思ふ事があつた。彼が日々に、戦ひ行く敵は何等尊敬の念をも

彼に湧かさせなかつた。凡て愚昧と謀叛と虚詐と卑劣との固い網細工としか思へなかつた。自分の生の慾望を永久に破滅の底に葬つたものは、黨の命令に従つて警察の探偵を所罰した事であつた。彼は平氣でそれを殺した。だが生氣のない、穩かではあるが偽りのある萬事について憐むべき、その人間の顔を見ると、彼は俄に自尊心も、自分の事業を重んずる念もなくなつてしまつた。彼は人間中で最も冷淡な最も感興の少ない人間として自分を考へた。だが意志の人たる彼は、黨を去るやうな事はしなかつた。表面は相變らずの調子で居た。けれども例の時からと云ふものは、彼の眼の中に、何か知ら冷たい恐ろしいものが出来た。彼は誰とも口を利かなかつた。

彼は又非常に珍らしい性質を持つて居た。それは恐ろしいと云ふ事を知らない事である。で此の情を持つた仲間の誰彼を憐んだ。中にもワシリー・カシーリンを最も憐れに思つた。だがその憐れみも、冷かな、殆んどお役目風なものであつた。

ウエルネルは死刑と云ふ事は單に死と云ふ事に止まらずして、それ以上何等かの意味がある事を知つた。何れにしても平然として刑を受けやう、最後までも、何事も起つたのではない、これからとても何の事もないのだと云ふ風にして居やうと心を決めた。かくして始めて刑に對する深い侮蔑の念を表はす事が出来、かくして始めて心の自由を保つ事が出来た。法廷に立つた時、ウエルネルの冷やか

な倨傲な圖太い氣質をよく知つて居る仲者の者も、恐らくそんな事があらうとは信じなかつたであらうが——彼は死とか生とか云ふ事は少しも考へては居なかつた。彼は胸の中であるむづかしい將棋をさして、それに最も深い最も落ち着いた注意を拂つて居た。將棋に妙を得た彼は入獄のその日から此の勝負を初めて、ずつと續けて來たのだ。有罪と極まつた判決の折ですら、その眼に見えぬ將棋盤の駒一つ動なかつた。

大方勝負を見るに至らずに終るだらうと云ふ考はありながらも、ウエルネルはなほそれを止めなかつた。もう今日一日と云ふ朝になつて居るのに、彼は又しても前夜に失敗した手をやり直しにかゝつ

た。両手を膝と膝との間に挟んで、長い間身動きもせず坐つて居た。と立ち上つて、頻と考へ込みながら歩き出した。彼獨得の歩き振で、體の上半部を少し前屈みにして、踵を強く踏みつける。地べたが乾いて居る時でも、足跡がクッキリと残つた。彼は又口笛で一寸したイタリーの歌の節廻しをやつた。それが又彼に物思ひを誘つた。

が今度は肩を揺ぶつたり、脈を取つて見たりした。動悸は早い、而も平に規則正しく、力強い音をして打つた。初めて牢屋へ放り込まれた新前のやうに、彼は監房や門や壁に作り付けのベンチなどを念入りにしらべて、さて獨ごつた。

「どうして俺にはかう歡びや自由の情があるんだらう。さうだ自由の情だ。明日の死刑の事を思ふには思ふが、何だかそんなものがないやうな氣がしてならぬ。壁を見ても、どうもそれまでないやうな氣がする。監獄に居るのぢやなくて、どこか斯う終身居なくちやならなかつた他の監獄を今し方出て來たばかりのやうに自由な氣がする」

ウエルネルの手は顛へ出した。こんな事は今迄に覺えない事だ。胸が次第々々に顛へて來る。何だか頭の中で焰の舌が動き廻つて、それがもつと暗い遠くの方を明るくする爲めに自分の頭を脱け出さう／＼として居るやうな氣がする。とう／＼焰め逃げ出やがった。

遠い地平線の方があんなに皓々と明るくなつた。

過ぐる二年の間ウエルネルを苦しめて居た得體の知れぬ倦怠の情は、死の影を見ると共に消え去つてしまつて、例の將棋をさして行くうちに、だん／＼と昔の若々しさが歸つて來た。それは更に青春の美しさ以上のものゝやうでもある。時として人を冥想の至極境までも高揚させるやうな心の驚くべき明るさを以て、ウエルネルはふと生と死との二つながらの姿を見た。その新眼界の崇嚴な姿が彼の心をひどく動かした。刀の刃のやうな狭い道を辿つて、高い山の頂を歩いて居るやうな氣がした。一方には生が見える。一方には死が見える。そしてその生と死とは二つの深い海の如くに美しく輝いて

目路の果遠く、一線無限につゞく水平線に至つて互に融け合つて居るやうに見えた。

「一體こりや何と云ふ事だ。何と云ふ神々しい景色だ！」かう彼は静かに云つた。

天帝の前へでも出たやうに、彼は思はず立ち上つて、姿を正した。そして透徹した眼力を以て、四壁を絶し、時と場所とを絶して、捨て、来た人生の深みへと視線を投げた。

かくて人生は新たなる光景を彼の前に呈した。彼は最早以前のやうに自分の如何なるものなるかを言葉の上に翻譯しやうとはしなかつた。そればかりでなく、かくも貧弱な、かくもみじめな人間の言

葉の何處を探つても、一つとして適當な言葉は見當らなかつたのだ。人間を見て侮蔑の念を起させたり、時には嫌惡の情までも誘つたりして来た、賤しい、汚ない、忌はしき事の數々は、恰も風船に乗つて空へ登り行く時に、狭苦しい町々の泥土や汚物が見えなくなり、醜いものが變じて美しくなるやうに、凡て跡方もなく消え去つた。

無意識にウエルネルはテーブルの方へ歩いて行つて、右の手をそれにかけて倚りかゝつた。流石に天性横柄で高慢であつた彼も、これまでは一度として今程な誇らしい自由な、そして威張つた態度は見せなかつた。一度として今程な顔つきをした事はなかつた。一度として今程に首を高く上げた事はなかつた。と云ふのも、これまで一

度として今此の獄屋に居て、死刑の前夜に、死の閻際に立つて居る程自由な力強い感に撲たれた事はなかつたからだ。

その輝きを帯びた眼から見ると、人間は全く新しい光景を呈し、未だ會て知らなかつた美と魅力とを帯びて居る。今や彼は時を超越した。つひ前の晩までは森の中の野獸のやうに吼咆して居るとばかり見えて居た此の人間と云ふものが、彼には未だ會て見ざる若々しさを現はして來た。これまで怖ろしいもの、ゆるすべからざるもの、卑しきものとばかり思つて居た事が、丁度吾々が小兒の不作法な振舞や無意識な天才の閃めいて居る連絡のない片言やさまざまの可笑しい過失やその残酷な殺生などを愛するやうに、突如として心を動

かすあどけないものとなつたやうに見えた。

「なつかしきわが友よ！」

かう囁いてウエルネルは思はず微笑を洩らした。その様子には最早以前のやうな高慢な人を壓しつけるやうな力がなかつた。再び彼は狭い獄屋の中に苦しむ囚人となつて、戸口からヂツと見つめて居る例の好奇な眼を見るのがいやになつた。つと坐つた。がいつものやうなこぼつた所がない。そして今迄に無いかよわい柔しい笑顔をして壁や格子を見た。と何か知ら今迄に起つた事のない事が彼に起つた。彼はさめざめと泣いた。

「おい君達！」と悲しい涙を拂ひながら彼は小聲で云つた。「おい君

達！」

あの際限のない傲慢な自由の心から、この燃ゆる情と切ない憐みの心へ移るのに、果してどのやうな神秘的な筋道を辿り來つた者か、彼には解らなかつた。眞に之れは自分の仲間を憐れむ心か。それとも涙の奥にはそれ以上に熱烈なそれ以上に偉大な何ものか隠されてあるのか。突如として甦り花咲き返つた彼の胸は、何事をも彼に告げる事が出来なかつた。

ウエルネルは泣いた。そして囁いた。

「おい君達！ おい君達！」

此の泣いてゐる、泣いた涙の奥から笑顔を見せて居る男を見たな

らば、裁判官であらうが、仲間であらうが、自分自身であらうが、誰一人としてかの冷淡な傲慢な懷疑的なそして横柄なウエルネルの面影を認め得るものはなかつたであらう。

絞首臺へ

馬車に乗る前に、五人の罪人はいらなくなつた事務室か、不用になつた應接間と云つたやうな、アーチ型の天井の、大きな冷たい部屋へ集められた。五人は御互に話し合ふ事をゆるされた。

此許可を早速に利用したのは、ターニャ・コワールチユクだけであ

つた。他の者共はたゞ黙つて氷のやうに冷たい手や、火のやうに熱い手を互に握り合つた。無言のまゝ、互に視線を避けやう／＼として、妙にどぎまぎした亂雑な集り方をした。かうやつて再び一緒にされて見ると、何だか今迄一人々々離れて感じて居た事が御互に恥かしいやうな氣がした。彼等は互に顔を見る事を恐れた。めい／＼に感じたり疑つたりした、新らしい、特別な、幾分憚るやうな事を互に見せ合ふのを恐れた。

それにも拘らず、彼等は顔を見合はした。そして一二度笑顔を見せるともつかり以前のやうに打ち解けた。別に變つた事も見えな

い。よし多少はあつたとしても、皆の上に等しくわりあてられたのだから、誰と云つて殊更に目につく程の變り方をして居る者はなかつた。皆は妙なそは／＼した風で話したり動いたりした。ゆる過ぎたり、早過ぎたり、凡てが發作的であつた。時には同じ事を口早に幾度も繰返す者があつたり、話しかけた事を中途で止めて置いてそれで最う云つてしまつたやうに思つたりする者があつた。併しこんな事を氣に留める者もなかつた。皆はまるで急に眼鏡を脱つた人達のやうに、それと解らず自分達の好く知つて居る物を眼をぱちんぱちんやりながら吟味したりなどした。彼等は後ろから誰かに呼ばれたやうに、時々ヒョツと起ち上つた。がそれすら誰も氣が付かない。ムスマとターニヤの頬と耳は燃えるやうに上氣して居た。セルゲイは

最初少し蒼くなつて居たが。おきに元に復した。

ワシリーだけは特に注意を惹いた。かう云ふ集りの中でも、彼は人と異つてひどく凄味を帯びて居た。ウエルネルはそれを感じて、深く氣づかふやうに小聲でムスヤに云つた。

「あの男は一體どうしたんだらうねえ。あの男がこんなには……。眞實何とか云つてやらにやならんよ」

ワシリーは誰だか好く分らぬやうに、遠くからウエルネルを見て居たが、やがて眼を伏せた。

「それはそうと、ワシリー、一體君の髪はどうしたんだ。一體君はどうしたんだ。何でもないさ。なあおい。おきに濟んでしまふんだ。

お互にしつかりしなきやならんよ。眞實だせ」

ワシリーは何とも云はなかつた。が、いよく最う何も云はない事と皆がきめた時分になつて、漸く遠い所から勢のない、不精不精な、凄い返答が來た。まるで永い間の哀訴の後に、墓石が放り出したやうな返答だ。

「そんな事を云つたつて、僕は何ともないよ。僕だつてしつかりしてるさ」

それを繰り返して云つた。

「僕だつてしつかりしてるさ」

ウエルネルは喜んで、

「さうとも、さうとも。君はえらいよ。さうなくちやならん」
かうは云つたものゝこちらの眼がワシリーの暗い沈んだ眼つきと
出遇ふと共に、ふと苦しみを覺えて、自分で自分に問うて見た。
「だが先生一體どこから見てるんだらう。どこから物を云ふんだら
う」

で優しみの籠つた調子で云つた。

「ワシリー好いかい。僕は非常に君が好きなんだよ」

「僕だつて君が非常に好きだよ」と苦しげに動く舌が答へた。
と突然ムスヤがウエルネルの腕を取つて、まるで舞臺に立つた女優
者のやうに無理に驚いたやうな表情をして云つた。

「貴方一體どうなすつたの。僕は君が好きだつて？ 貴方はこれま
で一度だつてそんな事を人に被仰つた事はないのよ。それにまあど
うしたと云ふのでせう。そんなにかゝやかしい顔をなすつてさ。そ
んなにやさしい聲をなすつてさ。まあどうしたんでせう。ねえどう
したんでせう」

ウエルネルも同じく白詞を考へく云ふ役者のやうな様子でそれ
に答へて、相手の若い女の手を握つた。

「さうさ。今になつて僕も愛情が湧いて來たんだ。他の者に云つち
やいけないよ。自分ながら恥かしいが、何だかひどく仲間が懐しく
なつたんだ」

二人の眼は出遇つて、互に燃え合つた。丁度電の閃めきで他の光が皆薄れて見えたやうに、二人の眼のひらめきで周囲の物は皆消え去つたやうに見えた。

「さう！」とムスヤは云つて更に「さうねえ」

「さうさ」とウエルネルも應じて。「さうだよ、ムスヤ、まつたくだよ」二人は何事かを了解し合つた。そして永久にそれが變らぬやうに是認し合つた。眼を輝かせて、足早にウエルネルはセルゲイの方へ近寄つた。

「セルゲイ！」と呼んだ。

だがそれに答へたのは當人でなくてターニャ・コワールチユクで

あつた。嬉しさのあまり、親心の誇らしさと云つたやうな心持にさへなつて泣き出しさうにして、彼女はセルゲイの袖を烈しく引張つた。

「まアどうしたと云ふんでせうね。ウエルネルさん。妾も此の人の爲めに泣かされてばかり居るんですよ。妾の苦しさをたらないんですもの。それに此の人は、此の人は體操なんかしてるんですよ」例のミュレル式だらう」とウエルネルは笑顔を浮べて訊ねた。

セルゲイは幾分きまり悪さうに眉をひそめて

「君、笑つちやいかんよ。僕は心から信ずる所があつて……」
皆は笑ひ出した。互に打ち解け合つた爲めに力強くもなり氣もし

つかりして来た所から、皆はだんぐと平常の様子に復して来た。だが矢張誰もそんな事に気が付かないで、相變らず同じだとばかり思つて居るのだ。と、突然ウエルネルは笑ふのを止めて徹頭徹尾眞面目な態度でセルゲイに云つた。

「君の方が尤もなんだよ、セルゲイ。全く君の云ふ通りだ」
「ちや解つたんだね」とセルゲイは満足さうに答へた。「無論僕等はね……」

かう云ひかけた時、皆は車に乗るやうに云はれた。役人共は親切にも皆に二人づゝ好きなやうにして乗るやうに云つてくれた。總べて役人共はひどくやさしかつた。どちらかと云へば優し過ぎる程で

あつた。聊かたりとも人情を示さうとしたものか、それとも現在起つて居る此の事やそれに附隨して起る凡ての事に對して自分達の無責任であるのを示さうとでもしたもののか。それは云ひ得ないが、兎に角役に當つた人達は皆蒼い顔をして居た。

「あの男とお出で！ ムスヤ」と云つてウエルネルは身動もせず立つてゐるムスヤをワシリーの方へ指で指圖した。

「わかりました」と肯づきながらムスヤは答へて「で、貴方は？」

「僕？ さア、ターニヤはセルゲイと一緒にだらうし、貴女はワシリーと一緒に。ちやまア僕は獨りで行く事にしやう。何でもないさ。

僕の事だからねえ」

庭へ出ると、シットリとした、ほの暖かい空気が彼等の顔と眼に軽く觸れて、息をつませらせ顛へた體に泌み込んで、さつぱりした氣持にさせた。此の刺激物をたゞの風、軟らかなしつとりとした春の風だと丈にはどうしても思はれなかつた。

胸たゞならぬ春の夜は溶け行く雪のけはひを漂はせて、限りなく廣がつて居た。雪解の水は石にも響を傳へた。勢の好い、忙しげな小さい水の滴が次から次ぎと慌たゞしく落ちて、絶間なく歌を歌つた。偶々滴りの一つが遅れて落ちたり、早く落ち過ぎたりすると、歌はくづれて楽しい水音となり、威勢の好い亂音となつた。やがて大きな滴りが重さうに落ちると、又しても調子の好い痾高な春らしい後光が出来て居る。

い歌が始まる。街の上には監獄の塀よりも高く、電燈の明りで蒼白い後光が出来て居る。

セルゲイ・ゴローフインは深い溜息をして、さてその清いさわやかなな空気を肺から外へ出すのを惜しんで居るやうにヂツと息を凝らした。

「こんな好い天氣がもう永くついで居たのかね。」とウエルネルは訊ねた。「もうすつかり春だ」

「漸く昨日からでさア」と人々は慌て、丁寧な答へた。「随分寒い日が続いて居りましたよ」

一つ又一つ眞黒な馬車が来て、二人づつを乗せて、門にゆれて居

る燈火を目當てに暗の中を出て行つた。どの馬車の周囲にも兵士の灰色の姿が動いて居た。馬の蹄は高く響いた。時々水氣を帯びた雪の上で馬が滑つた。

ウエルネルが馬車に乗らうとして屈んだ時に、一人の憲兵が曖昧な聲で彼に云つた。

「お前と一緒に行く者が居るんだぞ」

ウエルネルは驚いて

「誰が何處へ行くんだい。あゝ、さう。他にまだ一人居ると云ふんだね。誰かいそれは」

兵士は何とも云はなかつた。暗い隅の方に何か知ら小さい者がチ

ツとして居る。だがやはり生きて居て、縮こまつて臥て居る。横から来るカンテラの光をうけて、開いた眼が光つて居る。腰かけようとする、足が其奴の膝にさはつた。

「こりや失敬」

と云つたが返事がない。車が出かゝつてから漸く其の男は下手なロシア語で問ひかけた。

「おめえ誰だかね」

「僕はウエルネルと云ふ者で××を暗殺しやうとした爲めに、死刑の宣告を受けたんだ。で君は？」

「俺アヤンソンだよ……俺アどうしたつて殺される譯がねえだ」

二時間内には二人は解し難い大きな神祕にぶつかるとだ。二時間内には二人は生を去つて死に行くのだ。で、二人共今そこへ行く所だ。それにも拘らず二人は心安くなつた。生と死とは二つの異つた平面の上を時を同じうして進んで行く。而もその最後までも最も可笑しい最も馬鹿々々しい些事にまでも、生は矢張生だ。

「君は一體どんな事をしたのかね」

「俺ア親分の野郎に刀ア打つ込んで、金盗んだい」

聲の調子で考へると、いかにもヤンソンは眠たさうであつた。ウエルネルは暗い中に對手のくにや／＼した手を探し出して握つて見た。ヤンソンは不精不精それを引込めた。

「怖いかい」とウエルネルが訊ねた。

「俺ア絞め殺されるなア厭だ」

二人は黙した。やがて又ウエルネルは對手のエツソニヤ人の手を探し出して、自分の乾いた熱い兩掌の中へしつかりと握りしめて見た。相變らず動かない。でも今度はヤンソンの方もそれを引込めやうとはしなかつた。

彼等は押しつまつた馬車の中で息が詰りさうであつた。その微臭い息は兵士の服の臭や、こびりついた汚物の臭や濡れた皮の臭と溶け合つた。大蒜の安煙草の臭を含んだ若い憲兵の息が、絶えず向ひ合つて坐つたウエルネルの顔に流れた。併し刺すやうな、新鮮の空

氣が窓から吹き込んでくれるので、此の小さい動く箱の中では外より却てはつきりと春の消息が伺はれた。馬車は右へ曲つたかと思ふと、左へ曲り、時には引き返して戻るやうにも思はれた。何だか永い間一つ輪をぐる／＼廻つて居るやうな氣のする時であつた。最初は青味が、つた電燈の光が重く垂れた窓掛の間から洩れた。と突然一轉して眞暗の中へ入つた。最う郊外へ出てS——の停車場へ近くなつたと彼等旅人の思つたのはその時であつた。時とする馬車の曲り方があまり急な爲めに、ウエルネルの屈めた血の氣のある膝と憲兵の屈めた血の氣のある膝とが擦れ合つた。何しろ死刑が近づいて居るなど、はどうしても信じられなかつた。

「何處へ行くだね」と突然ヤンソンは訊ねた。暗い馬車の絶間のな
い永い間の動搖の爲めに彼は眩暈がして胸が悪くなつて來た。

ウエルネルはそれに答へて、前よりも一層堅くエツソニヤ人の手を握りしめた。彼は此の眠つて居る小男に何か特別に優しい親切な言葉が云つて見たくて堪らなかつた。何だか最う世界中で一番好きな人間のやうな氣がして居たのだ。

「ねえおい何だか君は窮屈さうぢやないか、もつと此方へ寄りたまへよ」

初めヤンソンは何とも云はなかつたが、暫くして答へた。

「ありがたう。俺アこいで樂だがね。お前さまア、お前さまもやつ

ばし殺されるだかね」

「さうとも」とウエルネルは意外な元氣の好い、殆んど笑つて居るやうな調子で答へた。その様子はいかにも氣樂さうで何だかまるで氣に入りのニワカ役者の仲間が自分達にふざけて見せやうとして居る愚にもつかぬ馬鹿々々しい狂言の事でも話して居るやうな調子であつた。

「お前さまカミサンあるだかね」とヤンソンが訊ねた。

「いゝや。女房なんか。僕は。なアに、僕は獨り者だよ」

「俺もさうだよ。俺やつぱし獨り者だ」

ウエルネルは眩暈がし出した。時々何かの祝の宴會へでも行くや

うな氣がする。妙な事だが死刑場へ行く者は大概同じ事を感じるものさうだ。恐怖と苦悶の擒となつて居ながらも、彼等は何か非常な好い事が起るやうな漠とした歡びを感じるのだ。現實の世界はめちやくちやに狂ひ出し死が生と結婚して幻影を生むのだ。

「とう／＼來た」とウエルネルは陽氣に物珍しげに云つた。車は止つた。彼は輕やかに飛び下りた。がヤンソンはさうでなかつた。彼は何も云はずにたゞがんばつて、ものうさうな風で、どうしても下りるのを拒んで、扉の取手にしがみ付いた。憲兵はその力のない指をゆるめさせて、腕を攫んだ。イワンは角へつかまつたり、戸につかまつたり、車の輪につかまつたりしたが、矢張あとから／＼憲

兵のするまゝにされてしまつた。彼は物につかまると云ふよりは、寧ろ物に粘りついたのだ。随てその手を離させるのにも大した力がいらなかつたのだ。要するに兵士等にはかなはなかつたのだ。

いつもの夜の通り、停車場は暗く、さびしく、死んだやうになつて居た。旅客列車が最う通つてしまつた後なので、囚人等を待つて居る車があつても、それには別に燈火の必要も働く人の必要もなかつた。ウエルネルはひどく倦怠を覺えた。恐ろしくもなければ苦しくもないが、何だか體屈で仕方がなかつた。大きな、重たい、だるい倦怠が、何處へでも好いから行きたいやうな、どこでも好いから臥ころんで眼をふさぎたいやうな欲望と一緒に、全身に充ち渡つた。

彼は脊伸びをして續けざまに欠伸をした。

「もつと手早くやつつけてくれると好いんだがなア」とものうさうに云つた。

ヤンソンは何も云はずに、身震ひした。

けち臭い燈火のついた客車へ乗り移るのに兵隊に取り巻かれたさびしいプラットホームを歩いて行く途中ウエルネルはセルゲイ・ゴロフインが自分の傍に居るのに氣がついた。セルゲイは何か手眞似をして話し出した。「ラムプ」と云ふ言葉だけ解つたが、あとの言葉はだるい長い欠伸で消されてしまつた。

「何を云つたんだい」とウエルネルは問ひ返して、又欠伸をした。

「輝り返し……輝り返し」の所のラムプがくすぶつて居る」とセルゲイが言つた。

ウエルネルは振り返つて見た。全くガラスがもう眞黒になつて居る。

「さう、くすぶつてるね」

ふと彼は思つた。「ラムプが燻ぶつて居やうが居まいがそれが何だこんな場合に……」。セルゲイの方も無論同じ事を考へたに違ひない。彼はウエルネルの方をチラツと見てすぐに顔をそむけた。が二人共欠伸をしながら立ち留つた。

皆は何の苦もなく列車の方へ歩いて行つた。ヤンソン一人だけ連

れられて行つた。初めは足を突張つてプラットホームに足の裏を粘り付けて居たが、とうとう膝を曲げてしまつた。全身の重味が巡査の腕にかゝつて、酔漢のやうに足を引き擦り靴の先を木造のプラットホームに引き擦つた。困難のありつたけを爲盡しても、別に何とも云はずに人々は彼を客車の中へ引きずり上げた。

ワシリー・カシーリンは誰の手も借りずに歩いて、無意識に仲間のする通りの事をした。客車の階段を上らうとして、後すさりをしたので、一人の巡査が腕を支へてくれた。と、ワシリーは烈しく震へ出して巡査を押しつけながら、鋭い叫び聲を發した。

「えッ！」

「ワシリーどうしたんだい」とその方に駆けつけてウエルネルが訊ねた。

ワシリーはぶる／＼震へながら黙つて居た。巡査は困つてしまつて、苦しうにして説明した。

「支へてやらうと思ふのに此の人が、此の人が……」

「さア、ワシリー、僕が支へてやらう」とウエルネルが云つた。

彼は友の腕を取らうとしたが、一方はそれを押しのけて、前よりも大きな聲で怒鳴つた。

「ワシリー、僕だよ。ウエルネルだよ」

「分つてゐよ。さわつちやいかん。僕は一人で歩きたいんだ」

さう云ひながら矢張震へて彼は客車の中へ入つて隅の方に座を占めた。ウエルネルはムスヤの方へ屈んで眼でワシリーの方を示しながら小聲で云つた。

「まア、あの先生どうしたと云ふんだらう」

「困つたものですわねえ」とムスヤも小聲で答へた「あの人は最う夙に死んでるんですわねえ、ウエルネルさん死と云ふ事は眞實にあるものでせうか」

「知らないねえ。だが無いやうに思へるよ」と眞面目な考へ深い調子で答へた。

「妾もそれを考へて居たんですの。なのに、あの人と云つたらねえ

ほんとに馬車に乗てる間ぢう妾を困らせ通したんですわ。まるで死人の傍について旅でもして居るやうでしたの」

「僕には分らないがねえ。ムスヤ。恐らく人によつては死と云ふ事はあるに違ひない。だが後にはそれも無くなるんだらう。現に僕なども初めは死と云ふ事は明らかに在るやうに思つて居たが、今では最う在りやしない」

ムスヤの少し蒼かつた頬が赤くなつた。

「以前には貴方に在つたんですの。貴方に？」

「さうさ。だが最う無くなつた。貴女には？」

彼等は客車の戸の音を聞いた。チゲーンのミチカが唾を吐きなが

ら息をハア／＼云はせ靴の踵をがた／＼云はせて這入つて來た。そして四圍をじろりと見廻して、一寸立ち止つた。

「場所が無えせ、旦那」と彼は疲れていら／＼して居る巡査に云つた。「氣樂にして行けるやうして貰えましょ。で無いと俺アお前様とは一緒に行けねえだ。いつそ此處であのランプン所でも釣るし下げて殺して貰つた方がえゝだ。何だ、馬鹿野郎共、何てい車あてげえやがるだ。これでも汽車だとぬかすだな。まるで鬼の腸だ。さうだ。汽車ぢやねえぞ」

かう云つたかと思ふと、急に頭を低く下げ、頭を突き出して、他の囚人達の方へ進み寄つた。もぢや／＼の髪の毛と鬚とで一抔にな

つた中から彼の黒い眼があら／＼しい、鋭い、そしてどちらかといへば狂氣じみた光を放つた。

「あゝあ」と彼は叫んで「これが俺等の居る所だかなア。どうだね先生？」

彼はウエルネルと向ひ合に坐つて、手を差し出した。やがて眼をパチ／＼させながら屈んだかと思ふと、素早く相手の首に手をからめた。

「お前さまもかね？ えゝ？」

「さうとも」と云つてウエルネルは笑顔を見せた。

「みんなかね」

「皆さうだ」

「あゝ、あゝ」と齒をむき出してチゲーンは云つた。そして他の囚人をじろツと見廻はしたが、ムスヤとヤンソンの二人にだけは永い間眼を据ゑた。

「大臣の一件でだね」

「あゝ。君は？」

「なアに先生私なアまるで話が違えますだ。私アそねえに偉え人間ぢやござせん。私ア、先生、たゞの強盗でさア。たゞの人殺しでさア。まアたんだア違えましねえだなア、先生。ちつとべえ動いて私も仲間人させておくんせえ。お前様方のやうな御方の中へ私のや